七月興行

文楽座

人形浄瑠璃

四つばつと

一部 金十五錢

文樂お祭月興行

緣りの夏、昔なつかしいお祭月を迎へ皆樣の御健康の益々お熾んなことをお欣び申上ます。偖て、當文樂座人形淨瑠璃は久しく各地方を巡業この程漸く破格の成功を收めて歸阪致しました。爰に大阪夏の景趣お祭月を一層華々しく飾らんと清新な若手連を拔擢いたし主班に古靱太夫を据え、得意の曲目に、更に珍らしき名作を配列、潑溂、生鮮の氣分を漲らせ大方みなさまの御期待に副ひ奉る次第で御座あます。何卒より以上の御聲援、御支持を賜るやう偏にお願申上げます。時節柄觀覽料もぐつと切下げを斷行し、時間も夕方五時開幕といふお祭月にふさはしい、殊に新らしい冷風裝置に爽涼を增し、涼い興樂の殿堂として皆樣をお迎へ致す次第で御座あます。この文樂お祭月興行の一日こそ寔に夏の大阪を語る恰好のもので御座あませう。

昭和七年七月一日

四ツ橋

文樂座

昭和七年七月一日初日

初日　四時開幕

二日目より　五時開幕

・御觀覽料・

一等椅子席御一名　金二圓

二等席御一名　金八十錢

三等席御一名　金四十錢

一等お座席御一名　金二圓三十錢

一等お座席
一等椅子席は五日前より
前賣切符發賣致居候

前賣切符専用電話
電話南　南四七一一番
七四〇八番
三七八八番

お草履の準備は御座あますが、靴草履はそのまゝ御入場出來ますからなるべく靴、草履でお越しを願ひます。

本誌へカツト廣告御掲載希望の向は文樂座編輯部へ希ます

あらゆる印刷

永井日英堂印刷所

大阪市西區土佐堀通一丁目

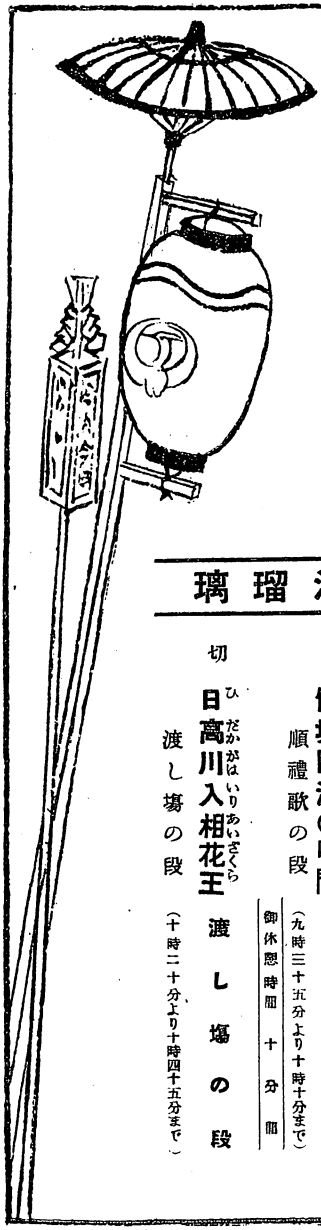
長三四四九九
八〇四四
三〇一番

(44)土佐堀

文楽座　大夫　竹本　津太夫

新作　浜の真砂と相生の松

文樂お祭月興行
七月の豫定時間表



人樂座文形淨瑠璃

前

近頃河原の達引

四條河原の段

（五時より五時三十分まで）

御休憩時間　五　分　間

堀川猿廻の段

（五時三十五分より六時五十五分まで）

御休憩時間　二十五分間

四條河原の段

堀川猿廻の段

中

一の谷嫩軍記

熊谷陣屋の段

（七時二十分より九時二十分まで）

御休憩時間　十五分間

熊谷陣屋の段

次

傾城阿波の鳴門

順禮歌の段

（九時三十五分より十時十分まで）

御休憩時間　十　分　間

順禮歌の段

切

日高川入相花王

渡し場の段

（十時二十分より十時四十五分まで）

渡し場の段

人形芝居について

◇人形芝居發達のこと
◇文樂座なり立のこと
◇人形頭說明のこと

今から見ては簡單なものに相違なかつたけれど、後世人形と呼ぶ種類の物は、日本でも遠い昔からあつたのであります。其れは傀儡子に始まつたもので、傀儡子の名は已に十餘年前に『和名抄』や『新猿樂記』『雲州往來』に見えて居り、傀儡子の輪廓は、王朝末期の文章博士大江匡房の『傀儡子記』に傳はつて居つて、傀儡子は遊牧の民で、男は狩を表業に、木偶や土偶を舞はせたと御座います。其當時に、四三と云ふのが傀儡を舞はせた事が『散木奇歌集』に見えて居ります。手遣ひの幼稚な物には相違なかつたでせうが、多少の糸が附いて居たかも知れない、と云ふ想像は出來ない事もありません。其後傀儡子は、門附か辻立で命脈を維いで居たらしう御座いますが、淨土宗の起るに至つて、傀儡子の大方は淨土宗の行者になり、特技の人形を舞はして勸化の効を顯はしたものらしく、所謂首掛け芝居の形式ではあつたが、菩佛薩の本緣や、寺社の緣起、即ち謂ふ所の本地物を語る說經と結んで、人形舞はしは自然と諸國に擴がる樣になりました。之れが人形舞はしの擡頭する遠因だつたと思はれます。而して、其內には例の三味線が渡來して來るし又お粗末ながら淨瑠璃といふものも出來た、即ち京都の目貫屋と云へるが西の宮から人形舞しを誘ひ出して、茲に始めて三味線に上した淨瑠璃、又それに合せて舞す人形と此三者が綜合される事に成りまし

たのが、慶長年中、即ち徳川の始頃ですが、忽ちにして京では四條五條の如き或は江戸の堺町とか葺屋町とか、櫓が立つて此人形芝居が繁昌しつゝのであります。順序として當然此頃には最う人形の類も増してはゐたのですが、然し舞臺などは固より無く其人形として首があるばかり、遣ひ手の手が人形の着物の裾から袖口へ出されて舞されたもので、大阪の石井飛彈掾が始て其手足の工夫もしたものですとか、由來此掾號なるものは人形師の所有なりしを後に淨瑠璃太夫の勢強くこれを專らにするに至つたとの事。さて竹田のから、くり人形が出來たり、野呂松のゝろま人形が出來たり、次郎三郎がおやま人形を使つたり、殊には彼の元祿時代になると大阪へ義太夫が現はれて竹本座をはじめ、又近松翁が現はれて此義太夫節のために人形芝居に最も適切な名淨瑠璃を澤山書き卸ししかも其人形遣ひとしては辰松八郎兵衛と云ふ名人が出て、今の出遣ひの如きも此人によつて始まつたと云ふのが、始めは此人形を下の幕と上の顔隠し幕の間から出して遣つてゐたので、畢竟人形の動くに隨つて自然遣ひ手の身体も動くのが見好くないから黒幕の陰に黒頭巾して遣つてゐたものを、愈々今度八郎兵衛が裃を着け手摺を離れ無

衾の手妻を遣ふに其全身少しも亂るゝ事がないといふ評判を取つたのであります。加之他方また豊竹座の出來るあり、即ち西と東と同じ大阪の地に於て太夫三味線、作者から人形遣ひと全く競爭的に繁昌を來したのですから、從つて其進歩發達は眼覺しいものがあり、道具建から人形衣裳總てはいと美々しく立派やかを盡し、舞臺大幕の上に小幕を引くやら山簾を本山の張ぬきにするやら、太夫も出語りをするやら、例へば人形にしてからが先づ眼が動き、指先が動き、享保の末には竹本座『大内鑑』の與勘平彌勘平が腹をふくらまし、元文になると豊竹座『武烈天皇

艤』の佐手彦の眉を動かしはじめるなど、非常に發達を遂たのであります。即ち言を換れば當時名人の遣ひ手が輩出した次第で、中にも吉田文三郎の如きは享保始め竹本座の『國性爺後日合戰』に初出勤、錦舍の出遣ひに片手の晴業を示して以來といふものは實に此人形については工夫を凝らしたもので、其一例を擧ぐれば『夏祭』の人形に始て帷子衣裳を着せるとか、或は其遣つた一寸女房おたつに桔梗の帷子、黒繻子の前帶淺黄の綿帽子を着けさせた如き、今なほ歌舞伎で眞似てる所事實此時代といふものは、操盛んを極めて歌舞伎はあれど無いも同然、幟は林立して其贔負は凄まじい有樣であつたと云ひます、江戸とて矢張之と同じく、慶長の昔薩摩淨雲が淡路の人形舞しと此人形芝居を始めて以來、各派の淨瑠璃芝居が誠に繁昌してゐたのですが、享保に一端大阪の義太夫芝居が入つて來てからと云ふものは又漸次に其勢力範圍と成つてしまひ御案内の同樣に歌舞伎狂言などは全く此人形の眞似のみ演てゐたものであります。前云ふ辰松も三郎兵衛も共に江戸へ來て其妙技を揮つた事があるのです。兎も角も此人形芝居の全盛は凡そ百年間、寶曆から明和以後になると漸次本場大阪でも亦江戸の方でも其勢力は歌舞伎に奪はれ、結局あの大阪の新興北堀江座すらも大した事には成らなかつたと見るべきであります。然し此間に在つても人形は其一個に所謂黒坊四五人も掛かり、或は出遣ひ二人も掛かる事、其他太夫の引抜早替などのケレン早業は愈々進歩を見せたので、而も操芝居としては前述の如く、其後は盛んならぬ各座の起伏消長が今日に至れりと云ふ次第で、それも今や獨り當大阪の文樂座が現存するのみで他には語るべきが無いのであります。さて當文樂座は百餘年の昔淡路の人植村文樂軒が大阪高津區に櫓を起したのに始まり、一時中絶しましたのを十七年終に東區淡路町五丁目

御靈神社境内へ移つたのでありまし。以來發展を來たしてゐましたが大正十五年晩秋不慮の災禍に喪失しましたが機を得て昨昭和五年一月四ツ橋に新築開場した次第であります而も日本にこれ一座ぎりと云ふのは心細い次第で、彼の能樂と同樣日本の古典的舞臺藝術として、之を永遠に保存すべき、怖らくは國民的義務があらうかと考へます次第で御座ゐます。序でながら此人形は大體、首胴、手及び足の四部に分ける事が出來、而も其首あるひは頭につきましては勿論大まかではあるが大體の役々が定まつて居ります。例へばげん、いし(檢非違使)と云ふのは、竹本座の『用明天皇職人鑑』の時檢非違使の役に使つたから此名が出たので其後は廣く世話時代共に用ひられて、例へば『寺子屋』の源藏、『妻八』の八郎兵衛、或は『千本櫻』の銀平『陣屋』の盛綱のごとき、なほ之の眠り目なるはあの盲兵助などに使ひます。今では實盛なども之ですが然し南水漫遊などを見ると別に成つて居るやうであります。それから矢張南水漫遊には素盞嗚とありますのが今の所謂孔明と呼ぶ頭で由良之助などにも使ふ事があると云ひます。兎もあれ菅相亟や『薄雪』の兵衛、あるひは『紙治』の孫右衛門などを勤める首で矢張竹本座へ近松が書いた『日本振袖始』から出た人形だと申します。それから若男といふのは源太とも呼んでゐるとか聞きますが持役としては『朝顔日記』の駒澤に『太十』の重次郎、その眼隅へ張を入れ其眉を引きつめると『阿古屋』の重忠に成つたりし他種類の苦男は敦盛の役などをすると云ひます。又所謂おやまの中にはおむすと云つて之は勿論娘の事で『野崎』のお染『壺坂』のお里『妹脊山』のお三輪などを勤めるのもあります。南水漫遊に傾城とあるのも多分之と同じものかと考へます。斯んな具合で今云ふ南水漫遊には凡そ廿六種の人形品目が擧げられて居るのであります。

前　近頃河原の達引

四條河原の段
堀川猿廻の段

四條河原の段

横淵官左衛門　竹本鏡太夫
井筒屋　傳兵衛（竹本町太夫　竹本文太夫）
廻しの久八　豊竹富太夫
仲買勘藏（豊竹辰太夫　豊竹千駒太夫）
（鶴澤友平　野澤吉左）

人形

横淵官左衛門　吉田玉幸
仲買勘藏　吉田玉市
井筒屋　傳兵衛　吉田扇太郎
廻しの久八　吉田光之助

『それや聞えませぬ傳兵衛さん』で有名なこの淨瑠璃はおしゅん傳兵衛の心中を主材としたもので、元文三年十一月十六日の朝京都聖護院の森に於て發見された吳服屋井筒屋傳兵衛と先斗町近江屋の抱へお俊との情死事件と、同じ頃京の公卿侍と所司代の下部とが四條顔見世芝居の歸途喧嘩双傷に及びし一件と、孝子として表彰された猿廻しの丹後屋佐七の話とを取合せ佐七を與次兵衛に作りてお俊の兄として構想したものです。天明五年五月江戸肥前座に書下され、爲川宗輔、筒川半二、奈河七五三助の合作でありますが、これより先き專竹八重太夫が天明二年道頓堀中の芝居で語つてゐます。この堀川は全曲の中の卷になつてゐます。

（床本）

四條河原の段

名に高き四條河原も冬されば川風寒く吹すさび往來も涙の石走る、水音高く夜は猶いとしん〳〵と物すごく降雨よりも我胸の戀路にくらむ官左衛門尻引からげ高足駄指傘の横しぶき勘藏引つれのつさ〳〵川邊に茂る柳影、傍り見廻し立とまり、イヤナニ勘藏、曾頃祇園の社内にて出入の町人傳兵衛めを饗金をもつて一杯くはせ、彼が手代萬八と、その方が働きにて銜取たる三百兩、分口取らし

た其後はいかが致した、イヤモ其時はやばな仕事、どふやら斯やら言くろめ、ひやいな所を漸遁れ萬八とこの勘藏分口の金せしめたれど、昨日今日まで影隱しぶら付て居たればモウ根太切、が爰で逢たは悪方の神申し旦那久し振じや、何ぞ味い事はごんせぬかいのふチヽ有共〳〵今宵此所で待伏するは外でもなく日外より紛失せし飛日川の茶入此度將軍家より所望に依て俱吟味に及びし所彼傳兵衛奴が今宵四ツまでに尋れ出そふと請合しは先達某が密に盗み取し事、どふやら氣取つたアノ毛二才今宵此所へ釣出し人しれずばらしてしまい、行衛知ざるお俊めを尋れ出して身が女房何とよい魂膽で有ふがなと、語るを聞て仲買勘藏横手を打て、ヤ、さつてもシタリ出來たく〳〵フハヽヽヽ併あいつもちつくり骨のあるやつ今にもうせたらこな様一人此勘藏も俱に加勢を、ムヽナニ、サ〳〵たかのしれた素町人、餘人を賴むに及ばぬ事、それよりは、まづ其方は是より直に引返し、邪魔になる久八めをぶち放しお俊の有所を尋れ捜し引かたげて立退くれよ、チツト其くらいの事は朝飯仕事、モシお氣づかひなされますな、ムヽ出かしたういやつ、と當座の褒美と投やる包み、おつと合點して、やつたと、欲と悪とを仲買勘藏川端さして走り行く、後に横淵したり顔、腰の大だらすちりとぬき、寢刄合さして打點頭、鞘に納めて待ぞ共しらぬ井筒屋傳兵衛は龜山のお屋敷より急御用とのしらせを聞き、雨をしのぎの辻駕にて急ぐ道筋、井筒屋としるしの提灯打落せば、惚り仰天、駕舁共、こりやたまらぬと駕打捨いづく共なく逃て行く、駕の内には驚きながら、何事やらんと垂引上げ飛で出たる傳兵衛がそれと見るより聲をかけ、ヤア何者なれば此狼籍、ムヽウ聞へた往來の人を惱して剣取をする盗賊よな、ヤア盗賊とは慮外千萬コリヤ其方が出入の屋敷御勘定役の官左衛門様だと聞て傳兵衛小腰をかがめ、ハヽコレハ〳〵雨夜の事なり、あいろは見へず、存じ寄れば只今の無禮、眞平御免下さりませ、さりながら其又官左衛門様が何故有て、此所にヤ、お尋れ申も暇おしくお屋敷よりの急御用御免とばかり、傳兵衛はよらずさ

はらず行んとする、アヽコリヤ待〳〵其屋敷の急用と言たのは某が拵へことだはい、エヽサア其方をここへ釣出したは、別儀でもないたかがわれを打放しお俊を女房にする心だ、まだそればかりでない、館の重寶飛日川の茶入を某が盗み取し事氣取つたはうぬが不運、生置ては後日の妨げ、觀念ひろげ、と拔かくるかはして、利腕しつかと取、コリヤ何となされます、マヽお待なされませ〳〵ハテ扨マアお待なされませモ其太切ないお國の重寶、あなたが所持なさるヽことやら町人風情の私しが知ふやふもござりませねども、あなたの口より茶入の事、仰有こそもつけの幸ひなければならぬ飛日川其茶入故若殿樣、御身の上にかかはる大事、お家のかきん、今此時何卒お戻し下さりませ、あなたに御難のかからぬやう、身に引受けて、納まりの仕樣もやうは私が心一つにござりますれば、ここの道理を聞分て茶入をお渡し下されかし、賴みまするとひたすらに、土に額をすり付て、詞を盡す井筒屋が心の内ぞせつなけれ、元來邪智の官左衛門何か心にうちうなづきムヽヤ、コリヤ、尤、武士は當て碎けとやら、わけて涙もろい官左衛門だ、戻しにくい所なれど、左程までに其方がお國を思ふしほらしさ、志にめんじ、飛日川、只今汝に渡してくれん、スリヤ私に其茶入を、チヽ價の金は金千兩耳を揃へて請取ふはい、エヽム、成程いかにも承知致しました、シタが途中の儀なれば、金子は明日、アイヤべん〳〵こそりやならぬ、じやと申て大まいの金、持合そふやうもなし、明早朝には間違なふ急度持參致しませふ、イヤ成らぬ、それまで茶入は私に、いやだ、お預けなされて下さりませ、エヽやかましいはい、其やうに廻り遠い事、此官左衛門きらひだはい、コリヤ身が揚詰にしたお俊めを影になり、日向に成、盗みくらひし素丁稚め、コリヤ官左衛門が武士は捨つたはいやい、サヽヽお道理でござります〳〵モそれおつしやられますと私がお詫の申樣もござりませぬ、モ此上は私を打なりと嚏なりとあなたの胸の晴るやう御存分に遊ばして、茶入はお渡しくださりませコレ申ごふそ此儀を御了簡と胸をす

へたる傳兵衛が心ぞ思ひやられたり官左衛門はしたり顔、ムゝスリヤ何か、踏れてもぶたれても申分はないと申かイヤモ茶入さへお戻し下されば、たとへ此身はどふなつてもムゝゝゝハゝゝゝムゝゝゝゝハゝゝゝゝコリヤそふなくては叶はぬ筈じやてハゝゝゝ然らば汝が申す通りそろ〳〵料治にかゝろふかい、まづどたまからはり倒さふかアイヤ尻こぶたからがよからふか、ムゝンじたい此生じらけたしやつ頬を見る度事に、カアプウ胸が悪いはい、ヤイ粕賣女のおしゆんめさよふも〳〵ちゝくり合、長の年月某を大馬鹿者に仕おつたな、つもり〳〵し意趣ばらし胴性骨に覺へよ、アイタゝゝこりやあんまり、何だ〳〵其つら何だ口惜ひか無念なか、ムイヤ左樣ではござりませねど、あんまり嚴しいお手の内サこれで、あなたのお顔も立ませふどふぞ茶入を私にチゝ戻してやらふ請取と言つゝ茶入追取て、せき留石へ投付れば微塵になつて飛日川、碎け散こそ是非なけれ、ヤゝゝゝ是程までに、ことを分、あまつさへ、泥脚にかゝる大事の場所と思ひ手向ひもせず勘忍の二字を守つて詞を下げ賴むもお家大切さ、殿の浮沈におよぶ茶入、打碎たる大悪無道コリヤモウ絶体絶命じやはい、ナニ絶命だ、ムゝン絶命なれやわりや、どふするチゝ眞斯すると、切付る、こなたも强氣のめつた斬、うけつ流しつ、戰ひしがいかがはしけん官左衛門、石に躓きよろ〳〵よろ、すきを見すましエイヤツト脊骨をかけて切下げられよるめく所をのつかゝり、思ひ知やと、とゞめの刀鞘も通れと突つらぬき一息ほつと突出すかれ、チあの鐘の音は清水寺、冥途へ導く諸行無常チゝそふじや〳〵と身づくろい、覺悟極めし其處へ息もすた〳〵、廻しの久八、すかし眺めてヤア若旦那じやござりませぬか、チゝ久八、よい所へよふ來てたもつた、餘儀ない譯で官左衛門を切殺し、とても生ては居られぬ此身、親人への不孝の段〳〵お詫申てお俊へもよきにとばかり後言さし、手に取脇差久八押へて、アーコレマアおまちなされませ、あぶない〳〵〳〵ハテ扨マア氣をしづめて若旦那私わ言事とつくりと聞しやりませ、斯言ふことも有ふかと氣

堀川猿廻しの段

（役毎日替り）

前　豊竹呂太夫
ツレ　鶴澤友衛門　叶
後　豊竹つばめ太夫
ツレ　鶴澤清二郎　豊澤仙糸

人形

弟子おつる　桐竹紋司
與次郎の母　吉田小兵吉
猿廻し　與次郎　吉田榮三
娘　おしゆん　吉田文五郎
井筒屋　傳兵衛　吉田扇太郎

はいらて共、どつさくさエヽ外の事でもござりませぬが、彼紛失の茶入の事、サア其茶入を官左衛門がたつた今、打碎て仕舞おつたはい、サヽ宜敷ござります〳〵ハテお氣遣ひなされますな、そりやお前樣、眞かいな贋物でござりまつせ、エヽサア宵にひらりと見付し勘藏合點行じと付廻し窺ふ中に案のぜふ、お俊樣を引かたげ、かけ行く所をひつとらへ、しめ上て樣子を聞ば官左衛門に賴まれたと、いちぶしゞゆの咄し誠の茶入はお前の手代行方知ぬ萬八に預けてあると勘藏めが苦しさ餘つてさつきの白狀、モウにつくひやつは萬八め、モシ若旦那、切腹とは悪い御合點短氣は損氣、わるい事は申ませぬ〳〵片時も早ふ飛日川取戻すが上分別、ササヽちやつとお出なされませ〳〵ムヽスリヤあの茶入は贋物かエヽ忝い、さりながら悪人なれ共お家の家來切殺せし此傳兵衛所詮遁れぬ天の網サア其網も何もかも身に引受る此久八、後かまはずと若旦那サお早ふお立なされませ〳〵コレマ宵からのどさくさかマ髪もばら〳〵アヽ何ぞ仕樣はムヽマア〳〵是なりとヽ、手拭につゝむ涙の頰かむり、人の見ぬまにサア早ふぜひに〳〵と久八がすゝめの詞傳兵衛は心濟れど立あがり行つ戻りつ踏迷ふ、疵持足のはかどらず心せきくる早瀨川、更け行く空も定めなき戀と無常をうば玉の闇を力に落て行く。

（床本）堀川猿廻しの段（切）

おなじ都も世につれて、田舎が増の薄煙、堀川邊に住居して、後家の操も立つ月日、琴三味線の指南屋も、合の手もつれ氣もつれを、保養がてらの藥風呂、あふぐも我を澁團扇、目さへ不自由な暮しなり 詞おつる樣嘸ぞ待遠にあらうなア、そしてなにやらのさらへであつた、ガ〜それ鳥邊山、アリヤじたい心中事、會にでも彈くのなら、お前は女の方、お繁さんは男の方、かけ合にうたふがよいぞへ、ドレ〳〵お繁さんのかわりに、私と掛合ひにうたひませうと、老手彈手もしほらしき二上りワタ女肌には白無垢や、上に紫藤の紋中着緋紗綾に黑繻子の帶、年は十七初花の、雨にしほる〜立姿、男も肌は白小袖にて、黑き繻子に色淺黃裏

二十一期の色盛りをば、戀といふ字に身を捨小舟、どこへ取付く島とてもなし、鳥邊の山はそなたぞと、死に行く身の後髮、彈く三味線は祇園町、茶屋のやま衆が色酒に、亂れて遊ぶ驅け合ひ 合あの面白さを見る時は 詞アヽイエ〳〵それではとんと聲にしほれがないはいな 歌あの面白さを見る時はと、かう諷ひなされ。アイ、あの面白さを見る時は、詞ガツトヨシ〳〵染殿そなたと某が、去年の初秋七夕の、座敷踊をかこつけて、忍び逢ふたる事思ひ出す 詞ガヽ今日はマアそこ迄〳〵、精が出る程あつて、きつう手も廻り出したモウ〳〵どこで彈きなさつても恥かしい事はないぞへと、聞いて笑顏の片男波、又明日といふ汐に、お鶴は立つて歸りけろ。母を大事と油斷なき、見過ごも輕き小風呂敷、肩に乘せたる猿廻し、戻りはいつも日暮前與次郎はいきせき門口から 詞母者人〳〵今戻つたぞや、ガヽ兄戻りやつたか嘸ぞひもじかろ、茶も湧いてある、膳もそこにして置いたぞやガヽ德よ今戻つたかよ、今朝から子猿めが親を尋てやかましい、コレ兄や、ちやつと傍へやつてやりやいのアイ〳〵左樣でござんしよとも、ソレちやつと乳を呑してやりおれ。イヤノウ與次郎、そなたが孝行にしてたもるに付け、私が此長々の病も、いつ本服する事であらうと思へば、勞の上に猶勞れる、僅な弟子衆の餘情や我身の働きで、此養生がマヽなるものかと思へば藥も毒となり、母ではな

うて子供の爲には苛責の鬼と思はるゝ、鬼は冥途にあるものを、つれなの老の命やと、身を悔みたるむせび泣き、哀にも又いぢらしゝ詞アヽコレ母者人、ソリヤマア何を云はんすぞいの、其樣にみそやかな身代ぢやと思はしやるか、此間弟子入した米やの息子殿から長々お袋の煩ひで、嘸かし勝手が悪からうと、云ふて陽か花かと申すやうな、上白米の仕送り、店々の旦那衆から、何なと用があるなら云ふておこせ若し、出養生さしますなら、幸な隱居所もある程にと、云ふて來るお方もあり、羔饅頭生魚、近所隣へ早々すそわけもしられば、鯛赤貝の類は横町の鮓屋へ卸賣、モコレ案じる事は微塵もないぞや、それにまだ〳〵まだ氣の毒なは、此家主が此家を居なりに、買てくれぬかと頼まれる。ヤレいやゝの〳〵アヽあた世話な家持よりは金持が、遙ましであらうかと、母に案じをかけさせぬ、贅八百さへ一貫に、たらぬ節季の事譯を、云ふ下稽古やこれなるべし。嘘とは知れど老の身は、子にしたがふがならひぞと機嫌よげに打ちうなづき詞ガヽそれ聞いて落付きましたが落付ぬは娘が事、此間も親方が、おしゆんを預けに來ていはしやるには、コレ傳兵衛殿と云ふ客の事で、ちと内に置かれぬ事がある、醫へ傳兵衛が尋れてござろ共、おしゆんが歸つて居る事は包み隱さればならぬぞやと、くれ〳〵も云しやつたぞや、サアわしも其入譯を聞た故、おしゆんが心根を思はずしらず涙か、ドレ灯を燈そと棚のすみこそ〳〵取出す行燈の、灯かげも洩るゝ暖簾ごし詞おしゆん、コレおしゆん、アイと返事もしほ〳〵と思ひなやみし顔形、マア〳〵爰へと小聲になり詞門の戸はかけてある、見る人も聞く人もない、方々で噂を聞くに、此間の川原の喧嘩、殺し人はサ殺し人はわが身の客の傳兵衛殿なれど大恩請けた久八と云ふ者が、代りに捕られて往つたげなが其場に落てあつた小柄かあの傳兵衛殿が御屋敷から、拜領した小柄ぢや故天命遁れず御詮議最中、なれども其夜から傳兵衛の行衛も知れず、其あひ方の女郎はおしゆんと云ふ事をお上にもよう御存じで、親方の方へもいろ〳〵と、御詮議あれど、これ

も行衛が知れぬと云ひ切つて、今もめてあの最中ぢやと、取々の噂評判、おりやもう聞く度毎にびくゝすること、聞くほどせまるおしゆんが胸詞其夜の起りも皆私故、どこにどうしてござるやら心元なき逢ひたさも、云ふに云はれぬ此場の品、いかゞと胸もふさがりし、母は一途に娘の可愛さ、詞コレ〳〵おしゆん案じる事はないわいの、併し突詰た男氣で、ひよつとこちの家へ來て、又物ざんまいでも仕やせまいかと、四五日は夜の目もろくに、モ寢られぬまゝの物案じ、世間にたんとある格なし心中やなどしてくれたら、此母は目かいは見えず、兄はアレあの樣な臆病者もしもの事があつたらば、跡で母はどうせうぞ、袖乞物貰ひに歩いても、そりやもう一つもいとませぬけれどもそなたの體に凶事でもあつたら、おりやもう直ぐに死んでしまふぞや、若い氣に前後思はず、義理ぢや、イヤ人の落目を見捨てはと、詰らぬ義理を立拔いて、年寄の此母につらい目見せてたもんなやと、可愛さ餘る親心、アヽ南無阿彌陀佛も涙聲、兄も俱々ヤコレおしゆん詞今母の云はるゝ通り、何の義理もへちまもいらぬ、どいてしまへばあかの他人ぢや又おれも氣にかゝつて、好なものさへ咽へ通らぬわいのう、母者人の氣休め、おれが腹助けぢやと思ふて、どいてたも、ヤコレ賴む〳〵と正直一遍、母の心と兄の詞、勿體ないと思へども、切るに切られぬ胸の内所詮死なればならぬ身の、此場を拔けて其上でと、心一つに思案を極め詞母樣、兄樣お二人の、お詞よう合點いたしました殊に又傳兵衛さん、ツイ一通りで逢つた客、深い半太夫サハリ譯でもないわいなア、併し勤のならひにて、人の落目を見捨てる為、里の恥辱とするわいな、とても末の詰らぬ事わしや得心してをりまする詞ちよつと逢つて其上で憎う悪うもない樣に、得心をさせまして品よう譯の立つ樣に詞イヤ〳〵其樣に譯立てると云やつても、あつちに得心せぬ時は、それ〳〵行がけの駄賃馬で踏殺し、アヽイヤ〳〵無理殺しにせうもしれぬわいの、コリヤめつたにはかみ合されぬわいの、おゝ兄の云やる通りぢや、そなたに怪我でもあつては、傳兵衛殿とやらも難

儀思ひ切るのがあつちの爲、わが身に心引されては、つい捕へられるはしれた事、退狀をやつたらそなたの事も思切つてかゝ切るとも〳〵、遠い國でも影を隱したら、身を遁れまいものでもないわいの。コレ〳〵むづかしかろ共ツイ一筆、兄硯箱取てやりやサヽ早う〳〵と母と兄、詞にいなも泣顏を隱す硯の海山と、重る思ひのべ紙に、筆の立どの跡や先、涙に墨のにじみがちなる胸の内、書殘すは露知らぬ、與次郎は傍から詞コレノコレ其樣に長たらしう書ずとも、ツイどきますと書いてもすみさうな事ぢや。イヤノウ書いたものは後々迄も殘る物、男の去狀と同じ事、こつくりと譯の分る樣に書いてやるがよいぞや。アイ此狀にこつくりと、御合點の行樣に、兄さん、此文お前からお渡しなされて。オツトよし〳〵此狀さへあれば千人力ぢやマア〳〵母者人も落付しやれ、こやかく云ふ內九ツ前お前も奧でサヽもうれやんせ、かゝそれ〳〵今夜こそゆつくりと、心よう寢るであらう兄もそなたもそこに寢やと、奧底もなき隱てをば、押明てこそ入にける詞サアおしゆん、こちらも爰で往生いたそ、アイとおしゆんが俱々に、暫し此世をかり蒲團、薄き親子の契りやと、枕に傳ふ露涙、夢の浮世と諦めて、更け行く鐘も哀れ添ふ。頃しも師走十五夜の、月は冴れど胸の闇、過ぎし別の言ひかはし、死なば一緒と傳兵衛が、恐ぶ姿のしよんぼりと、彳む軒は目覺えの、慥に爰と門の戸へ、さはる相圖の咳拂ひ、聞くにおしゆんが飛び立つ思ひ、上げる枕も打はづす、與次郎は傍に高鼾心も俱に行燈の、灯ふき消さし足に心急ぐ程明兼れる、戸口の繋金表にも詞おしゆんぢやないか、傳兵衛さん、よう逢びに來て下さんしたと、云ふ聲寢耳に與次郎が、惚り起ると明くる門の口、妹か姿もくら紛れ、さらへる袖のふりあはせ、おしゆんと心得傳兵衛を、無理に引込取違へ戸口を內からぴつしやり引立て詞そりやこそつれに來おつたぞ、おしゆん必ず外へ出まいぞや、戸口におれが押へて居る、ヤア門に居るは傳兵衛ぢや、おのれを入れてよいものかと、いふもがたゞ胴ぶるい、詞コレナア兄樣わしや表に居るわいな何

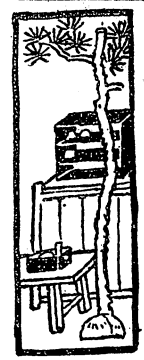
ぢや表に居るわいなア、ヤア其聲色置てくれ、そんな事喰ふおれぢやないわい、母者人、母者人、傳兵衛がおしゆんを殺しに來た故、今表へたて出した、おれ一人では手が廻らぬこなたも加勢して下され、加勢〳〵〳〵と、うろ〳〵〳〵〳〵うろたへ驚き母親も、何ぢや〳〵〳〵傳兵衛の加勢、ムゝまだ外に同類でもあるのかと、探り寄つたる傳兵衛が傍、詞コレ〳〵おしゆん、顛ふ事はない兄や母が付いて居る、マア氣を鎭みやと撫でさする、脊の手ざはり合點行かず詞コレ〳〵與次郎、どうやらこりや娘ではない樣なわいのヤアくらがり紛れに材木が紛れ込みやせぬかや、こなたつかまへて居て下されやと、探る手先に火打箱、がち〳〵ふるふ附木の光り、詞シヤアコレヤ妹ぢやない傳兵衛じや、お袋兄御、エゝ面目もない此姿と猶も小隅に屈み居る。コリヤヤイコリヤ其樣にしほ〳〵として見せて、おいらを欺して、おしゆんを突うとするのか、其手はくはぬと懷より、一通取出しこは〳〵ながら傍に寄り、詞コリヤ〳〵傳兵衛、おしゆんと我と手が切れぬと、科人のわれじやによつて、妹迄難儀するそれでさつきに妹に得心さして、どき狀を書かしてあれば、コレこれを見い、これぢやによつてモウ〳〵〳〵おしゆんが方に殘心氣は離れてあるわいムゝスリヤおしゆんが其退狀をサアどき狀ぢやエゝ其心さは知らず云ひかはした、詞を誠と思ふて、迷ふて來たが無念なわい、口惜いと齒を喰しばる男泣恨を聞くも隔たる戸口心はさう、じやないじやくり詞ガゝ嘸腹が立う道理ぢや〳〵、マア〳〵とつくりと氣を鎭めて、退狀を見ゝ下さんせいなア、ガゝそれでよい、長う物いやんな屑が出るぞ屑がコリヤヤイ〳〵傳兵衛おれが讀んで聞かしたうてもな皆目おれはナニアノソレヤ、祐筆ぢやわい、サアサア早うと封じめ切り突付られて目に溜る、涙を拂ひ、詞ナニ書置の事ヤア何ぢや、書置ぢやコレ〳〵兄正直な、惚りする事はないわいな、そなたは無筆わしや盲、書置じやと讀違へ、うろたへさして門口へ出で娘を存分にせうとのたくらみ、ハアハゝゝそんな嘘は喰ませぬサアサアほんまに讀ましやれ〳〵

コレコレ與次郎、表の娘に氣を付けて、門の戸を明きやんなや。オヽ呑込んで居る、爰にはおれが、ヘヽヘばり付いて居るわい、サア〳〵〳〵早う讀みやい、ものこそよう書かれ聞く事は祐、ヤナニ無筆じやないわい、サア讀だ〳〵〳〵。エ誠にこれ迄の御養育、海山にも譬へがたき親の御恩、殊更不自由なる御身の上、何卒首尾よう勤を遁れ、世を樂に過させまし候はゞ、せめて少しの御恩報じ孝行の片はしにもなり候はんとそれのみ朝夕祈り〳〵處〳〵、二世迄と云ひ交し〳〵傳兵衛樣、思はぬ此度の御身の難も、根を尋ねば皆われ故に候へば、今さら見捨て候ては、女の道立ち申さず候、不孝とは思ひながら、俱に覺悟を極め〳〵。オヽ母者人、どうやら風がかはつて來た樣な、サイノウわしも胸がどき〳〵とサア其跡をちやつと讀んで下され下され。エヽ俱に覺悟を極め〳〵、先程傳兵衛樣へ退狀と申して認めしは此事申上度きまゝ退狀と僞り書き殘し〳〵。何事も〳〵前世よりの定り事と、御諦め下され候、申上げたき數々〳〵、筆にもつくしがたく候へ共、心せくまゝ申入れ〳〵オヽ〳〵〳〵さてはさうした心かと驚く傳兵衛親子はうろ〳〵詞エヽ氣づかひな、コレ兄や娘を家へ、早う〳〵と母があせれば與次郎も、戸口明ければ走りよる妹を無理に四人が、顏見合して溜息の、涙はさらにわかちなく、何と詞も傳兵衛、泣く目を拭ひ詞一旦いひかはした詞を立て、俱に死なうと覺悟して、義理を立てぬくそなたの貞節忘れはせぬ嬉しいぞや思ひ廻せば廻す程、我こそ死なで叶はぬ身、そなたは科のない身の上、俱に死んではお二人の歎き、命ながらへなき跡の、とひ弔ひを賴むぞと詞にわつと泣き出し、そりや聞えませぬ傳兵衛さん、お詞無理とは思はれど、そも逢ひかゝろ始めより、末の末迄云ひかはし、互に胸を明しあひ、何の遠慮も內證の、世話しられても恩にきぬ、ほんに女夫と思ふ物大事の〳〵夫の難儀、命の際にふり捨て、女の道が立つ物か、不孝共惡人共、思ひあきらめコレ申し、一緒に死なして下さんせと隱せし剃刀取直す、詞マヽヽヽまて待おれやい〳〵〳〵コリヤやい、これで死ぬると命がない

ぞよ、コリヤまあ何の事ぢや、とん
と分らん樣になつてきたわい、殺し
に來たと思ふた傳兵衛殿より、今で
ばわれの方が手强うなつたぞよ、コ
リヤマアどうしたらよからうぞと、
云ふもおろ〳〵母親も詞かーさうぢ
や〳〵、我が子が可愛〳〵と子故の
闇に脇ひら見ず、これまでおしゆん
がお世話になつた、恩も義理も辨へ
ず、一圖に中を引別けうと、思ふた
母は義理知らず、賤しい勤する身で
も、女の道を立て通す、娘の手前面
目ない、そなたの心に恥入つて、何
事もいひません、傳兵衛樣と一緒に
の、コレ死出の道連れしやいのう、
したもこれ申し傳兵衛樣、定めて親
御樣達もござりませうが、親の心と
いふ物は、人間はおろか、たとへ鳥
類畜類でも、子の可愛さにかはりは
ないもの、おしゆん傳兵衛と云はす
氣か、もしやお前が死なしやつたと
親御樣が聞かしやつたら、悲しうて
〳〵此世に殘つて居る氣はあるまい
何國いかなる國の果、山の奥にも身
を忍び、どうぞ遁れて下さりませ、
娘も心に恥入つて、天にも地にもか
けがへない、可愛我子を心中に合點
してやる親心爰の道理を聞分けて、
コレ拜みます賴みますと、手を合は
したる母親の子故に迷ふ闇の闇、二
人は何と詞さへ涙に涙結ばるゝ、血
筋のわかれ與次郎も、涙の雨の古布
子、袖喰ひしばりしやくり泣き、ア
ー傳兵衛樣の泣しやるも道理ぢや
〳〵、道理々々と云ふて居ては、れ
つからはつからいつ迄も分らぬ道理
ぢや詞がコレ傳兵衛樣、母者人が今
の詞、御合點が參りましたか、エコ
リヤ我も得心してくれたか合點がい
たか、得心してくれたか、合點がい
たか、サーいーいー合點したらばどう
ぞ此場を、立退く分別、併し其形で
は人目に立つ、京の町を放れる迄、
此編笠で顏をかくし、幸ひの猿廻し
まめで二人が末長う、目出たう女夫
になりとげる、門出の祝ひに此與次
郎が、お初德兵衛が祝言の壽、此方
衆も生別れの盃、イヤ〳〵祝言の盃
と祝ひ諷ふも聲びくに有田ウタ お猿
はめでたやな合ヒヤウシ 舞入姿もの
つしりと〳〵詞コレ去りとは〳〵ノ
ウあろかいな、さんな又あろかいな
詞かゝ德兵衛樣ござんせ、餘りこな
樣が來やうが遲いによつて、お初樣

は顔眞赤にして、腹立て居やんすわいのうコレお初様、聟様が盃をしたいといのう、機嫌直して盃を、戴かんせ、コレ〳〵〳〵いたゞくノウ盃を、さんな又あろかいな、詞ヤコレ〳〵コレ聟様、足で盃をさすはあんまりつれない、それでは嫁御様が戴かんせぬわいのう、ひぞらすとほんまにさしてやらんせ、さうぢや〳〵〳〵そこでお初がいたゞいた物ぢやコレいたゞくのう盃を、さんな又あろかいなヒヤウシコレ嫁御の晝寢もころりとせい〳〵、ナコレエあろかいなさんな又あろかいな詞コレ〳〵聟様餘りつれなうさんすによつて、おしゆんヤアノ何嫁御様が起さんせぬわいの、そこらでちよつと起したり〳〵、ユ、コリヤ、コリヤヤイ、コリヤ、去りとは〳〵ノウあろかいなさんな又あろかいな、ヒヤウシ起たら互ひに抱付きやれ、オヽそれで機嫌が直つたぞ、エヽヽヽあろかいなさんな又あろかいな、くるりと返つて立たりな、立てくれ、コレ〳〵コレ立しやませ、序でに日和を見てたもれ、アヽよい女房ぢやに〳〵ノウあろかいな、なさんな又あろかいなヒヤウシ日和を見たらば落ちてたも〳〵、オヽさうぢや〳〵〳〵、お猿は目出たや目出たやなサヽヽヽヽヽさり〳〵此家を猿廻し、まさる目出たう何時迄も、命まつたう仕てたもと、目は見えねども見送る母、詞も此世で聞き納め、心の内の暇乞ひ明日の噂と形ふりも、やつす姿の女夫づれ、名を繪草紙に聖護院、森を

あてどに三重〜たどり行く。



熊谷陣屋の段

中

竹本相生太夫
鶴澤芳之助
鶴澤綱右衛門

切

豊竹古靱太夫
鶴澤清六

人形

妻相模　吉田文五郎
堤軍次　吉田文作
藤の局　桐竹政龜
梶原平三景高　桐竹門造
石屋彌陀六　吉田玉松
無官太夫敦盛　吉田玉七
源義經　吉田玉次郎
熊谷次郎直實　吉田榮三

中

一谷嫩軍記

熊谷陣屋

この淨瑠璃は寶暦元年十二月十一日初日の豊竹座に初演されたもので三段目の陣屋迄は並木宗輔の作でこの一の谷の三段目迄書て病歿しました。この曲の内容を申上げますと、一の谷合戦に行く熊谷次郎直實は堀川御所で義經に須磨の陣所の若木櫻に對して一枝を切らば一指を切るべしといふ禁札を渡されました。それは義經は平家の公達の薗の花をむざ〳〵散すなといふ謎であります。須磨の浦で敦盛を組敷いた直實は我子の小次郎を身替りに立てゝ首討ち實檢に備へ自分は無情を悟つて剃髪して蓮生と名を改めて行脚に出る。忠と義親子恩愛の至情に涙流るゝ大名作であります。

（床本）熊谷陣屋の段（中）

行空もいつかはさへん須磨の月平家は八嶋の浪に漂ひ源氏は花の盛りを見る中に勝れて熊谷が陣所は須磨に一構要害嚴しき逆茂木の中に若木の花盛り八重九重も及びなき夫かあらぬか人ごとに熊谷櫻といふぞかし花おらせじとの制札を讀て行人讀ぬ人一つ所に立集り扨も咲たり〳〵花より見事な此制札辨慶殿の筆じやがな扨も見事一つも讀めぬチゝあれはの義經樣か此花を惜み一枝切らば指一本切べしとの法度書ヤア花のかはりに指きろとは首切下地チゝこはや見

て居る中も虎の尾を踏む心地する皆ござれと花に嵐の憶病風ちり〳〵にこそ別れ行、はろ〳〵と尋れて爰へ熊谷が妻の相模は子を思ひ夫思ひの旅姿陣屋の軒を爰やかしこと尋しが幕に覺へ の家の紋嬉しや爰と内に入折節家の子堤の軍次立出て是は〳〵奥様かヲヽ軍次そなたも息災さふなマアめでたい〳〵熊谷殿や小次郎もかはる事はないか。早ふ逢たい逢せてたもハア旦那は今日御廟參り小次郎様は先頃より御前つとめで御下りなしマア〳〵長の御旅路お勞をお休めと挨拶とり〳〵なる所へ敦盛卿の御母藤の局虎口の難を遁れきてこけつ轉びつ花の影陣屋をめがけ走り付後より追手のかゝる者影を隠して賜はれとけはしき体に驚て相模は傍へ走寄るに見かはす互の顔ヤアお前は藤のお局さまではないか、そふいやるそなたは相模じやないか、テモ久しやなつかしやお床し様やと手を取てマアこなたへと伴ひ入るしたしき体に心をきかし軍次は勝手へ入にけり相模はやがて手をつかへ誠に一昔は夢と申す處大内に御座遊ばす時勤番の武士佐竹次郎殿と馴れ初め御所を抜け出東へ下りお前様のお身の上を承はれば御懐胎のお身ながら平家の御家門參議經盛様方へ縁付賜ふとの噂其折は世盛りの平家御威勢はます〳〵と影ながら悦びましたに此度源平の戰ひ御一門もちり〳〵と聞に付アヽ此藤の方様は何となされたどふ遊ばしたと一人苦にしておりましたにマア御機嫌なお顔を見ておめでたやお嬉しやヲヽそなたも無事でマア嬉しい懐胎で出やつた時の子は娘ごぜか男かアノ息災で育つて居るかと一寸寄ても女同士間つ間はれつ年月に積る言の葉くり返し嬉し涙の種ぞかし藤の方涙ぐみ世の盛衰はぜひもなや其時に產落したは無官の太夫敦盛とて器量發明揃ふた子を今度の軍に討死させ夫は八嶋の波に漂ひ我のみ殘る憂難儀淺ましの身の上とかこち賜へばヲヽお道理〳〵以前の御恩も有り連合にも語りお身の片付後世の營お心任せに致しませふ以前は佐竹次郎と申て北面同然の武士只今にては武藏國の住人志の黨の族頭熊谷次郎直實と人も知た侍と聞より御辜はヤアそなたの連合の佐竹次郎今では熊谷次郎と言ふか、ア

イ　スリヤアノ熊谷次郎はそなたの夫よなハアはつと吐胸の氣をしづめ何と相模以前大内にて不義現はれ佐竹次郎と諸共に禁獄させよとの院宣自が申宥め御所の御門を夜の内に落してやつたを覺へてかアツア其時の御恩何の忘れませふぞいなム〜其恩を忘れずば助太刀してそちが夫熊谷を自に討してたもエ〜イそりや又何のお恨みでサア最前も咄した院の御所のお胤無官の太夫敦盛をそちが夫熊谷が討たはいのエ〜そりやマア誠でござりますかスリヤそなたは何にもしらぬかサアはる〳〵と東より今來て今の物語聞てさむれの誠しからず追付夫も歸り次第樣子を尋る其間暫くお控へ下されと詞を盡し理を盡しなだむる折に表より梶原平次景高所用有て推參と呼はる聲ヤア何梶原とや見付られてはお身の大事まず〳〵こちへと御臺の手を取一間へ伴ひ入にける、程も有せず入來る梶原平次景高我意につのる横柄顔挨拶もなく座に付ば堤の軍次立出今日は主人直實志有て廟參り御用あらば某に仰置かれ下されたしと地に鼻付くれば平次景高ナニ熊谷殿は他所さなソレ家來共其石屋の親仁め引立きたれはつと答へて科もなき白毫のみだ六を平次が前に引居ればヤイなまくら親仁め儒れ何者に頼れ敦盛が石塔は建たやい平家は殘らず西海へぼつ下し誂らゆべき相手なければ察するところ源氏方の二股武士が賴しに違ひは有まいサア眞直に白狀ひろげ偽ると鉛の熱湯脊骨を割て流し込とおどしかけても正直一遍テモ扨も御無理な御詮議先ほども申た通り石塔の誂人は敦盛の幽靈五りんの事は扨置一厘も手附は取ず建ると其儘石塔の喰逃げせめて人魂でも手附に取たら小提灯のかはりに致しませふに冥途へ書出しはやられず本の是がそんしやうぼだい有樣の申上願以齋切德旋一切此通りでございますると取しめなさアー何おつしやつても糠に釘と軍次が詞に平次は悪智惠大かた石塔を建させたわるも合點〳〵熊谷戻らば三つ饑輪の詮議先そやつめを引立來れど一間へ入れば家來共石屋の親仁を無理やりに引立奥へ連れゆく。

（床本）熊谷陣屋の段（切）

奥へ連て行相模は障子押開き日も早

西に傾ぶきしに夫の歸りの遲さよと待つ間程なく熊谷次郎直實花の盛りの敦盛を討て無常を悟りしか遁に猛き武士も物の哀れを今ぞしる思ひを胸に立歸り妻の相模を兒目にかけて座に直れば軍次は頓て覆に成り先達て平次景高殿何か詮議の筋有とて御影の石屋を引連御出有り奥の一間に御待ちと委細を述ればムウ詮議とは何事ならん先其方は一獻を催し梶原殿を饗し申せサア早く行け〳〵ハテ扨何を猶豫すると叱りちらされぜひなくも相模に顏を見各して心を殘し入にけり。後見送つて熊谷コリヤ女房わりや爰へ何しに來たやい。國元出立の節陣中へは便りも無用と堅く言付け置たるに詞を背くといひ剩へ女の身で陣中へ來る事不届至極の女めと不興の体に相模はもぢ〳〵其お叱りを存じながらどふか斯かと案じるは小次郎が初陣一里往つたら樣子が知れふか五里來たら便りが有かと七里歩み十里歩み百里餘りの道をツイ都までホヽヽホヽヽヽチヽしんき登つて聞けば一の谷とやらで今合戰の最中と取々の噂さ故子に引されるは親の因果御了簡なされ下さりませマア此小次郎は息災で居ますかと、問ば熊谷詞をあらゝげ戰場へ趣くからは命はなきもの堅固を尋る未練な性根若し討死したら何とするいゝえいな、小次郎が初陣によき大將と引組んで討死でもいたしたら嬉しい事でござんしよと夫の心に隨ひし健氣な詞に顏色直しホヽ先小次郎が手柄といへば平山の武者所と爭ひ拔がけの高名軍門にかけ入ての働き手きづ少々負たれ共末代まで家の譽れエヽシテ其手疵は急所ではございませぬかソヽソレ〳〵〳〵まだ手疵を悔む顏付若急所なら悲しいかイヽエ何のいなかすり疵でも負程のはたらきは出かしたと思ふて嬉しさの餘りお尋ね其時お前も小次郎と一所においでなされたかホヽ危しと見るより軍門にかけ入り小次郎をむりに引立小脇にひんだき我陣屋へ連かへり某は其軍に搦手の大將無官の太夫敦盛の首取たりと咄しに扨はと驚く相模後に聞き居る御臺所我子の數と有あふ刀熊谷やらぬと拔くと所端摑んでヤア敵呼はり何やつと引寄するを女房取付アヽコレ〳〵聊爾なされなあなたは藤のお局樣と聞て直實悔りしハヽハ

〻〻〻〻ハ〻アコハ〳〵思ひがけなき御對面と飛退敬ひ奉ればコリヤ熊谷軍の習ひとは言ひながら年はも行かぬ若武者をよふむごたらしう首討たなサア約束じゃ相模助太刀して夫を討せサ何と〳〵と刀追取せり付け賜へばアイあい〳〵と返事も胸にせまりながらエ〻コレ直實殿敦盛樣は院のお胤と知りながらどふ心得て討しやんした樣子が有ふ其譯をと言もせつなきうろ〳〵涙ヤアおろか〳〵此度の戰ひ敵と目ざすは平の宗盛夫に隨ふ平家の一門敦盛は扨置誰彼と鎬を削るに用捨もならふかイヤノウ藤の御方樣戰場の義は是非なしと御諦め下さるべし。が其日の軍のあらましと敦盛卿を討つたる次第物語らんと座をかまへ扨も去る六日の夜早東雲と明くろ頃一二を爭ひぬけがけの平山熊谷討ち取れと切つて出たる平家の軍勢中に一際勝れし緋縅さしもの平山あしらひ兼れ濱邊をさして逃出すハテ健氣なる若武者や逃る敵に目なかけそ熊谷是に控へたり返せ戻せチ〻イ〳〵と扇を持つて打招けば駒の頭を立て直し波の打物二た打三打いでや組んと馬上ながらむんづと組兩馬が間にどふと落ちヤア〳〵何と其若武者を組敷てかされば御顏をよく見奉ればかみ黑々と細眉に年はいざよふ我子の年ばい定めて二親ましまさん其歎きはいか斗りと子を持つたる身の思ひの餘り上帶取つて引立塵打拂ひ早落賜へとすゝめさしやんしたかそんなら討ち奉るお心ではなかつたのチ〻サ早落ち賜へとすゝむれどイヤ一旦敵に組しかれ何面目にながらへん早首取れよ熊谷ナニ首取れといふかいの健氣な事をいふたなふサア其仰せにいとゞ猶涙ばむれにせき上しまつ此通りに我子の小次郎敵に組れて命や捨んさましきは武士の習ひと太刀も拔きかれしに逃さつたる平山が後の山より聲高く熊谷こそ敦盛を組敷きながら助くるは二心に極りしと呼ばる聲にハ〻アゼひもなき次第かな仰せ置ろゝ御事あらば言傳へ參らせんと申上れば御涙を浮べ賜ひ父は波濤へ趣き賜ひ心にかゝるは母人の御事きのふにかはる雲井の空定めなき世の中をいかゞ過き行賜ふらん未來の迷ひ是一つ熊谷賴むの御一言是非に及ばず御首をと咄す中より藤の局ナフ左程母をば思

ふなら經盛殿の詞に付きなぜ都へは身を隱さず一の谷へは向ひしぞ健氣によらふた其時は母も俱々悦んですゝめてやりし可愛やな覺悟の上も今さらに胸もせまつて悲しやとくどき歎かせ賜ふにぞ御尤とは思へ共相模はわざと擊はげましイヤ申しお局樣御一門殘らず八嶋の浦へ落行きたまふ中に一人踏とゞまり討死なされた敦盛さま數萬騎にすぐれた高名但し逃延身を隱し人の笑ひを受賜ふがお前の氣では嬉しいか御未練な御卑怯なと諫めに熊谷チヽ出かいた〳〵コリヤ女房御臺所此所にござ有てはおためにならぬ片時も早く何方へも御供せよサア〳〵早く行け〳〵我も敦盛の御首實檢に備へんヤア〳〵軍次はおらぬか、早來れと呼はる聲と諸共に一間へこそは入相の鐘は無常の時をうつ陣屋〳〵の燈火にいとゞ悲しさ藤の方アヽ思ひ出せば不便やな今はの際迄も肌身はなさず持つたるはコレ此青葉の笛我と我が身の石塔を建て貰ふた價にと渡して置いた此笛のわが手に入しも親子の緣こんばく此世に有るならばなぜ母にはまだ見へぬぞ聞へぬ我子やなつかしの此笛やとはだに付け身にそへて盡せぬ思ひやるせなきコレ申し其笛がよい御笹經だらにより笛の音を手向るが直ぐについぜん敦盛樣のお聲をば聞と思ふて遊ばせとすゝめに隨ひ藤の方なみだにしめす歌口もふるふて音をぞすましける。親子の緣の纜にや障子にうつるかげらふの姿は慥敦盛卿藤の局は一と目見るよりヤレなつかしの我子やとかけ寄り賜ふを相模は抱き留めアヽコレ申し香の煙りに姿をあらはし實方は死で再び都へ歸りしも一念のなす所有るまい事にはあられ共いぶかしき障子のかげ殊に親子は一世と申せば御對面遊ばせば御姿は消失んイヤなふ四十九日が其の間たましい宇宙に迷ふと聞せめては逢て一と言をと振放し〳〵障子ぐはらりと明け賜へば姿は見へず緋縅しの鎧はかりぞ殘りける。ハツト計りに藤の方相模も俱に取り付いて扨は鎧のかげなるか戀しと迷ふ心からお姿と見へけるかと俱にこがれて正体も泣くどくこそ哀れなれ。時刻うつると次即直實首桶携へ立出れば相模は夫の袂を控へコレ申し是が親子御一生のお別れせめて御首に成り共

御暇乞と願ふにぞ藤の局も涙ながらノウ熊谷そちも子の有る身でないか野山の猛き獣さへ子を悲しまぬはなきものを親の思ひを辨へて情に一と目見せてたもすがり歎かせ賜へ共イヤ實檢に備へぬ中は内に見んは叶はぬとはね退突退け行く所にヤア〳〵熊谷暫し〳〵敦盛の首持参に及ばず義經是にて見やうするはと一と間をさつと押しひらき立出賜ふ御大將ハヽヽヽはつと次郎直實思ひ寄られば女房も藤の局も諸共にあきれながらに平伏す義經席に着賜ひヤア直實首實檢延引といひ軍中にて暇を願ふ汝が心底いぶかしく密に來りて最前より始終の樣子は奥にて聞く急ぎ敦盛の首實檢せんと仰を聞くより熊谷ははつと答走り出若木の櫻に立おきし制札弓抜き恐げなく義經の御前にさし置さいつころ堀川の御所にて六獅太には忠度の陣所へ向へと花に短尺又此熊谷には敦盛の首取れよとて辨慶執筆の此制札則ち札の面の如く御誂に任せ敦盛の首討ち取たり御實檢下さるべしと蓋を取ればヤア其首はとかけ寄る女房引き寄せて息の根留御臺は我子と心も空立寄り賜へば首を覆ひコレ申し實檢に備へし後はお目にかけるこの首イヤサコレお驅ぎ有るなと熊谷がいさめに遮ぱしたなふ寄るもよられず悲しさのちゞに碎くる物おもひ次郎直實讃んで敦盛卿は院の御胤此花口南の所無は則ち南面の嫩一子を切らば一子を切るべし花によそへし制札の面察し申て討たる此首御賢慮に叶ひしが但し直實誤りしか御批判いかにと言上す義經欣然と實檢まし〳〵ホヽ花を憎む義經が心を察しアよくも討たりな敦盛に紛れなき其首ソレ由縁の人も有るべし見せて名殘を惜ませよと仰を聞よりコリヤ女房敦盛の御首ソレ藤の方へお目にかけよアイあいさばかり女房はあへなき首を手に取上見るもなみだにふさがりてかはる我子の死顔に胸はせき上身もふるはれ持つたるくびのゆるぐのをうなづく樣に思はれて門出のときにふり返りにつと笑ふた面ざしが有りと思へば可愛さ不便さ撃さへのどにつまらせて申し藤の方樣御歎き有た敦盛樣の此首ヤア是はサイナア申しこれよふ御覽遊ばしてお恨みばらしよい首じやと譽ておやりなされて下さりませ申し

此首はな私がおやかたで熊谷殿と忍び遂懐胎ながら東へ下り産落したはナコレ此敦盛様其節お前も御懐胎誕生有りし其お子が無官の太夫様兩方ながらおなかに持國を隠て十六年音信不通の主從がお役に立たも因縁かやせめて最期は潔ふ死なされたかと恨しげに問ど夫は喩もせん方涙御前を恐れ餘所に言ひなす詞さへ泣音血をはく思ひなり藤の局は御聲くもりナフ相模今の今迄我子ぞと思ひの外な熊谷の情そなたは嘘や悲しかろ斯した事とは露しらず敵を取ふの切ふのと言た詞が恥しい我子の爲には今の親コレ〳〵忝いと手を合せ是に付けてもいぶかしきは此濱の石塔敦盛の幽靈が建させたとの噂と言ひ秘藏せし青葉の笛石屋の娘が貰ひしとて我手に入最前其笛吹いた時あの障子にうつりし影は慥に我子と思ひしが詞もかはさず消失しはアイヤ其笛の音を聞てかけ出し敦盛の幽靈人目有りと引きさゞめ障子越しの面影は義經が志しと聞て御臺は我子の無事悟ながらも篝木の有とは見へて隔てられ又も涙にくれ賜ふ折ふし風にさそはれて耳を突拔螺貝の音かまびすく聞ゆれば義經は勇み立ちヤア〳〵熊谷着到しらせの螺の音出陣の用意〳〵と仰に直實畏まり急ぎ一と間へ入にけり。最前より様子聞居る梶原平次一間の内より踊り出で斯あらんと思ひし故石屋めを詮議に事寄せ窺ふ所義經熊谷心を合せ敦盛を助けし段々鎌倉へ注進と言捨かけ出す後よりはつしと打たる手裏劍は骨を貫く鋼鐵の石鑿うんと斗りに息絶るスハ何者といふ中に立出る石屋の親仁ハ〻アお前方の邪魔になるこつばを捨て上ました。扨幽靈の御講釋承つて先づ安堵もふお暇と出行をヤア待親仁コリヤ彌平兵衛宗清まで義經の詞に恂りはつと思へどそしらぬ顔ハレヤレマとつけもない御影の里に隠れのない白毫のみだ六といふヘーン男でえすハーーーーーー誠や諺にも至つて憎いと悲しいと嬉しいとの此三つは人間一生忘れすといふ其昔母常盤の懐に抱かれ伏見の里にて雪にこゞへしを汝が情を以て親子四人が助かりし嬉しさ其時は我れ三歳なれ共面影は目先に殘り見覺有り眉間のほくろナコリヤ隠してもサ隠されまじ重盛卒去の後は行方知

らずと聞しがハテ堅固で居たな滿足やと聞より彌陀六つか〳〵と立寄り義經の顏色の明く程打詠めテモ恐しい眼力じやよな。老子は生れながらにさとく莊子は三ツにして人相をしると聞しかかく彌平兵衛宗清と見られた上はエ、義經殿其時こなたを見遁さすば今平家の楯籠る鐵拐が峰鵯越を攻落す大將はサ有るまいもの又池殿と言い合はせ賴朝を助けずば平家は今に榮んものエ、宗清が一生の不覺是に付けても小松殿御臨終の折から平家の運命末危し汝武門を遁れ身をかくし一門の後弔へと唐土育王山へ祠堂金と僞はり參千兩の黃金と忘れがたみの姫君一人預り御影の里へ身退き平家の一門先立ち賜ふ御方々の石碑播州一國那智高野近國他國に建置し旋主の知れぬ石塔は皆コレ彌平兵衛宗清が涙の種と御存じ知らずや今度敦盛の石塔訛へに見へし時も御幼少にて御別れ申せし故御顏は見覺れ共心得ぬ風俗はイヤ世を忍ぶ平家の御公達ならんと思ふより心よく受け合しが扨は命にかはりし小次郎がぼだいの爲此濱の石塔は敦盛の志しにて有けるか、ヘツエいかに天命歸すればとて我助けし朝賴義經この兩人の軍配にて平家の一門御公達一時に亡ぶるとはハアー是非もなき運命やな平家の爲に獅子身中の虫とは我が事さぞ御一門倍臣の魂魄我を恨みん淺ましやと或は悔み或は怒り涙は瀧をあらそへり元來さとき大將義經ヤア〳〵熊谷障子の內の鎧櫃ソレこなたへはつと答へて次郎直實出陣の出立ちと好む所の大あらめ鍬形の兜を着しかゝへ出たる鎧櫃御目通りに直し置コリヤ親仁其方が大切に育る娘へ此鎧櫃届けてくれよコリヤみだ六ヤアみだ六とはフウ宗清なれば平家の餘類源氏の大將が賴むべき筋はムー面白いみだ六め賴れて進ぜましよしたが娘へは不相應な下されものマア內は何でござります

改て見ませふと蓋押し明くれば敦盛卿ノウなつかしやと藤の方かけ寄り賜へば蓋ぴつしやりイヤ〳〵此内には何にもない〳〵〳〵チーマ何にもないぞハヲ是でちつと虫が納つたイヤナフ直貫貴殿への御禮はコレ〳〵この制札一枝を切らば一子を切てヘツエ忝いといふに相模は夫に向ひ我子の死んだも忠義と聞けばもふ諦めて、居ながらも源平と別し中どふしてまあ敦盛様と小次郎を取かへやうがハテ最前も咄した通り手負と偽り無理に小脇にひつ挾み連歸つたが敦盛卿、又平山を追つかけ出たを呼かへして首討つたのが小次郎さ知れた事をと尖なる咄しに相模はむせび入エ〜胴慾な熊谷殿こなた一人の子かいのふ逢ふ〳〵とたのしんで百里二百里來たものをとつくりと譯も言ず首討たのが小次郎さしれた事をとも聞ぎどふに呵る斗りが手拵でもござんすまいと聲を上げ泣くどくこそ道理なれ心を汲で御大將勇みを付けんとヤア〳〵熊谷西國出陣時移る用意いかにと仰に直實恐れながら先達て願ひ上し暇の一件、かくの通りと兜を取れば切拂ふたる有髪の僧義經も感心有りホ〜さも有なんソレ武士の高名譽を望むも子孫に傳へん家の面目其傳ふべき子を先き立て軍に立ん望みはホウ尤コリヤ熊谷願ひに任せ暇を得さするぞよ、汝堅固に出家をとげ父義朝や母常盤の回向を頼むとしたしき御誼ハ〜ア有りがたしと立上がり上帶を引ほどき鎧をぬげば袈裟白無垢、相模是はと取付をヤア何驚く女房、大將の御情けにて軍半に願ひの通り御いとまを賜はりし我本懷熊谷が向ふは西方彌陀の國悴の小次郎が拔がけしたる九品蓮臺一つ蓮の縁を結び今より我名も蓮生と改めん、一念彌陀佛、即滅無量罪、十六年も一昔しア〜夢であつたなと、ほろりとこぼす涙の露、柊に置く初雪の日影にとける風情なり

長居は無益とみだ六は鎧櫃にれんじやくをかけた思案のしめくゝり、コレ〳〵〳〵義經殿もし又敦盛いき返り平家の殘黨駈集め恩を仇にてかへさばいかにチヽそれこそは義經や兄頼朝が助かりて怨を報ひし其如く天運次第うらみを請ん、げに其時は此熊谷浮世を捨て不隨者と源平兩家に由緣はなし互ひに爭ふ修羅道の苦患を助ける回向の役、チヽサ此みだ六は折を得て又宗清と心の還俗我は心も墨染に黑谷の法然を師と頼みおしへを請んいざさらば、君にもまず〳〵御安泰おいとま申すと夫婦連、石屋は藤のおつぼれを伴ひ出る陣屋のぬき、御緣が有らばと女同士命が有らばと男同士、堅固でくらせの御上意にハヽハヽヽヽ有がた涙名殘りの涙、又思ひ出す小次郎が首を手づから御大將此須磨寺に取おさめ末世末代敦盛と其名はくちぬ黃金札、武藏坊が制札も花をおしめどはなよりも惜む子を捨武士を捨、住どころさへ定めなき有爲轉變の世の中やと互ひに見合す顏と顏さらば〳〵おさらばの聲も涙にかきくもり、別れてこそは出て行く。

次

傾城阿波の鳴門

順禮歌の段

竹本南部太夫
野澤吉彌
竹本小春太夫
竹澤團六

この淨瑠璃は大近松の「夕霧阿波鳴渡」の飜案に、阿波德島の城主玉木家のお家騷動を取合せ、家老櫻井主膳が惡人小野田郡兵衛に主家の重寶國次の寶刀を盜まれて困難のところを舊臣十郎兵衛お弓夫婦及び藤屋伊左衛門等の盡力によつて寶刀を惡人の手より取返し主家安泰となるといふ筋。

近松半二、竹本三郎兵衛等の合作で順禮歌は八ツ目で有名なものであります。十郎兵衛お弓夫婦は刀詮議のために國許を立つて涙花玉造に身を秘めてゐる。その隱れ家へ或る日順禮の女の子がたづれて來る。それは國許にのこした一子おつると知れたが夫婦の今の身の上名乘らば共に同罪と母の愛に涙ながらに笈摺打きせ立たせます。親子恩愛の哀しくも痛ましき順禮歌の條りです。

人形

女房お弓　桐竹紋十郎
娘おつる　吉田榮三郎

（床本）　順禮歌の段

後打眺め女房が心がかりと、封押切讀度毎に驚く胸、ヤア、コリヤコレ夫を始め仲間の衆へも吟味がかゝり詮議嚴しくなつたる故さらへられし者も有、最早遁れず立退との知せの狀スリヤ十郎兵衛殿の身の上もけふ一日にせまつた難儀昨日長町裏で危い所をやう〳〵遁れヤレ嬉しやアと思ふ間もなく、今又此狀の文体では中々こふして居られぬ所我さても女

房の身、殊に衒の同類なれば、罪科遁れぬ夫婦が命、今更驚く氣はなけれど一合取ても侍の家に生れた十郎兵衛殿、盜賊衒と成果しも國次の刀詮議のため、重い忠義に輕い命、捨るは覺悟と言ながら肝心の其刀、有家も知れぬ其内に若此事があらはれては是まで盡せし夫の忠義皆むだ事となるのみか、死んだ後まで盜賊に、名を穢すのがチエヽ口惜、盜衒も身欲にせぬ女夫が誠を天道も憐み有て、國次の刀の詮議濟までの、夫の命助てたべと心の内に神佛誓は重き願世音、ふだらくや岸打つ波は御熊野の那智のお山にひゞく瀧つ瀨、年はやう〳〵とを〻の道をかけたる笈摺に同行二人と記せしは一人の大悲のかげ頼む、ふる里をはる〳〵こゝに紀三井寺、順禮に御報謝といふもやさしき國なまり、テモしほらしい順禮衆、ドレ〳〵報謝しんぜふと盆にしらげの志アイ〳〵有難うござりますと、いふものごしから瓜はづれ、マ可愛らしい娘の子、定めて連衆は親御達國はいづくと尋ねられアイ國は阿波の德島でござります、ムヽ何じや德島さつても夫はマアなつかしい、わしが生れも阿波の德島、そしてアノとゝ樣やかゝ樣と、一所に順禮さんすのかイヱ〳〵其とゝ樣やかゝ樣に逢たさ故、それでわし一人西國するのでござりますと聞てどふやら氣にかゝる、お弓は猶も傍に寄、ムヽとゝ樣やかゝ樣に逢たさに西國するとはどふした譯じやササヽサヽヽそれが聞たい、言て聞かしや〳〵アイどふした譯じやしらぬが、三つの年にとゝ樣やかゝ樣もわしをばゝ樣に預けてどこへやらいかしやんしたげな、それで、わたしはばゝ樣の世話になつてゐたけれど、どふぞとゝ樣やかゝ樣に逢たい顔が見たいそれで方々と尋ねてあるくのでござります、ムヽシテ親達の名は何と言ふぞいの、アイとゝ樣は阿波の十郎兵衛かゝさんはお弓と申します、と聞て惝り、コレ〳〵〳〵アノとゝ樣は十郎兵衛かゝ樣はお弓三つの年別れてばゝ樣に育られて居たとは、疑ひもない我娘、エーと見れば見る程稚顔見覺のある顔の癖ヤレ我子、かなつかしやと、言んとせしが、待暫し、夫婦は今もとらるゝ命、元より覺悟の身なれ共、親子と

言はゞ此子にまで、どんな憂目がかゝらふやら、それを思へばなまなかに、名乘立して憂目を見んより、名乘で此儘かへすのが却て此子が爲ならんと心を鎭めよそ〳〵しくチゝそれはマア〳〵年はも行ぬにはるばるの所をよふマ尋に出さしやつたのふ、其親達が聞てなら嘸嬉しうて〳〵飛立樣に有ふが、儘ならぬが世の憂ふし、身にも命にもかへて、可愛子をふり捨、國を立退親御の心、マよく〳〵の事で有ふ程にのコレむごい親ど必ず〳〵恨まぬがよいぞやイエイエ勿体ない何の恨みませふ恨る事はないけれど、ちいさい時別れて、こゝ樣やかゝ樣の顏も覺へず、餘所の子供衆が、かゝ樣に髮結て貰ふたり夜は抱れて寢やしやんすを見るとわしもかゝ樣が有るならあの樣に髮結て貰はふものと羨しうござんす、どうぞ早ふ尋て逢たいひよつと逢れまいかと思へばそれが悲しうござんすと、泣じやくりするいぢらしさ、母は心も消入る思ひ扨も〳〵世の中に親となり、子と生るゝほど深い緣はなけれ共、親が死だり、子が先立たり、思ふ樣にならぬが浮世、こなたもどれ程尋ても顏も所もしらぬ親達あはれぬ時は詮ない事じや、これいのこれもう〳〵尋ねづと國へ逝だがよいはいの、イエ〳〵戀しいこゝ樣やかゝ樣、たとへいつまでかゝつてなと尋れふと思ふけれどナ悲しい事は一人旅じやて、どこの宿でも泊てはくれず野に寢たり、山に寢たり、人の軒の下に寢ては擲かれたり、こはい事や悲しい事こゝ樣やかゝ樣と一所に居たりや、こんな目には逢まいものを、どこにどふして居やしやんすぞ、あいたい事じや、逢たいと、わつと泣出す娘より、見る母親はたまり兼チゝ道理じや可愛や、いぢらしやと、われを忘れ

登録商標 美音あめ
文泉人形壜入壜大小
贈用 御菓子 おかさ あめ おこし
文泉豆 文泉せんべい 味噌せんべい 結び昆布
銘菓珍味色々
文樂堂
文樂座前
電南六六九〇

て抱き付、前後正体歎きしが、是程親を慕ふ子を何と此まゝ逝されふ、いつそ打明け名乗ふかイヤ〳〵それでは此子も同じ罪、其時の悲しさを思ひ廻せばいなすが爲とチゝ段々の樣子を聞き我身のやうに思はれて悲しい共情けない共、いふに言れぬ事ながら兎角命がもの種、まめでさへ居りや、又逢れまいものでもない、コレ仕付けぬ旅に身を痛め煩ひでも出りや悪い、どこをしやうどに尋ふより其ばゝ樣の方へいんでいやるとの、追付けとゝ樣、かゝ樣が逢にいてじや程に、わるい事は言はぬ、なんの又此おばがわがみのためにならぬ事いふてよいものかいの、思ひ直してこれから直に國へいんで隨分まめで親達の尋て行かしやるを待ているのがよいぞやと、なだめすかすを聞わけて、エイ〳〵忝ふござります、お前が其樣にいふて泣て下さりますによつて、どふやらかゝ樣の樣に思はれて、わしや爰がいにとむない、申しおえさん、どんな事なと致しませふ程に申しお家樣お前のお傍にいつまでも私を置て下さりませ、エゝ悲しい事を言出して又泣すのかいの、もさつきにからわしも子の樣に思ふて、爰に置きいなしとむないと思ひ廻せども爰に置てはどふも爲にならぬ事が有によつて、それでつれなふいなすのじや程に聞き譯けていんだがよいぞやと、いひつゝ内へ針箱の底をさがして豆板のまめなを悦ぶ餞別と紙につゝんで持て出、コレ何ぼ一人旅でもたんと錢さへやりやとめる、わづかなれども志、此銀を路銀にして早ふ國へいにや、必ず煩ふてばしたもんなと、銀を渡せば押戻し、嬉しうござんすれど、銀は小判といふものをたんともつております、そんなりやもふさんじます、忝ふござりますと、泣々立を

現代的

電話戎三七五六番

引ごゞめ、それはそふでも是はわしが志と無理に持して塵打はらひコレもふいにやるか、名殘りが惜しい別れとむない、コレ今一度顔をと引寄せて見れば見る程胸せまり、離れがたなき憂思ひそれとしられど誠の血筋、名殘おしげにふり返り何處をごふして尋れたらと〻樣やか〻樣に逢れる事ぞ逢してたべ南無大悲の觀音樣、父母の惠も深き粉河寺、佛の誓ひ頼もしきかな、泣々別れ行く後を見送り〳〵延上りコレ娘ま一度こちら向いてたも〳〵〳〵いのふ、折角長の海山こへ艱難して、あこがれ尋ぬるいとし子に不思議と逢はあひながら名乘らで逝す母が氣はマごの樣に有ふと思ふ、狂氣半分〳〵は死んでゐるはいの、まだ生先のある子をば親故路頭に立たすかと其儘そこにごふと伏、消入ばかり歎きしが起直つて涙を押へイヤ〳〵ごふ思ひ諦めても今別れては又逢事はならぬ身の上、譬難儀かからばかゝれ、又其時は夫の思案、程も行くまい追付て連て戻らふ、チ〻そふじや〳〵と子に迷ふ道は親子の別れ道、後をしたふて。

席上料理
グルリ
夜十一時半迄
大阪心斎橋
もり半本店
電話 五〇〇番

渡し場の段

清姫（竹本南部太夫）
船頭（竹本小春太夫）
竹本長尾太夫

ツレ
（鶴澤友若）
（鶴澤寛市）
（豊澤廣助）
（豊澤歌野）
（鶴澤友叶）
（鶴澤太郎）
（豊澤團三郎）
（竹澤團伊二）

切

日高川入相花王

渡し場の段

この淨瑠璃は寶暦九年（百七十三年前）の竹本座、書下しで竹田小出雲竹本三郎兵衛、二歩堂等の合作全五段の中四の切で舞踊道成寺にも按舞されて有名なものです。

朱雀天皇の御宇さる尊きお方が山伏姿の僧安珍に身を窶して紀の國眞那古の庄司が邸に泊り合せ、かれて戀仲の小野苧環姫と會ひ道成寺さして道行せんとするを庄司の娘清姫も安珍に執心して嫉妬の念に堪えず跡を追掛ける。日高川の渡し場へかゝつたが船頭は賴まれて渡してくれぬので清姫の胸は炎え立ち一念凝つて蛇体となつて河を渡るといふ筋合で御座あます。

（床本）渡し場の段

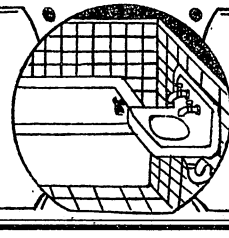
人形

清姫　桐竹紋十郎
船頭　桐竹紋太郎

愛は紀の國日高川、清き流れも清姫が胸の炎は夜叉鬼神、靡く柳のつがもなや、遠山寺の鐘の音にとつかはこゝ、亂れ雲、つまづきし石も他生の緣心のはし、結ばれし身は、知る人もなし

しろ人は哀れとぞ知る戀のやみ松吹く風に誘はれて、只さへいとゞ物凄し、女心の一筋に、はぎもあらはに漸と、日高の川を愛かしこ、安珍樣いのふ〳〵我夫のふと馳迫り、呼べど叫べど松風の、外に答ふるものもなき、早山の端にさし登る、隈なき夜半の月影は、晝を欺く如くなり、幽に見ゆる川岸の、もやひし舟にハア〳〵嬉しや、愛は日高の渡し場、是を越

ゆれば道成寺へ間もなし、渡り賴まん急がんと、川の汀に立寄てノウ其舟早ふ渡してたべ渡守どの〳〵いのふ、コレのふ〳〵と呼ぶ聲も枯野の秋の船ならで渡り兼るぞ甲斐もなき、寢耳にフツト船長は苦押のけて佛頂面ヱ〻何ぢや、やかましいわい、夜夜中がやか〳〵と。早ふ〳〵の其聲であつたら夢を取逃しだわい、夜が明けたらば渡してやらう、ヱ〻コレよふ寢て居る者をあたどんくさいとつこうどに顏をしかめてつぶやけば、ノフ自らは道成寺へ急ぐ者、早ふ爰を渡してたべ、サ早ふ〳〵ヱ、何ぢや、どぜう汁が喰たい、アハ〻〻〻テモいやらしい奴ぢやわい、ハ〻ア聞えたコリヤ何ぢやな、宵に渡した山伏の、跡追ふて來た女ぢやな、ヱ〻それなれば猶渡されぬ、ならぬ〳〵さにべもなき詞に姫は涙聲、ヱ〻ソリヤ胴慾ぢや〳〵〳〵わいのふ、親の許した我夫を餘所の女子に寢取られて何とこの儘歸られふ、不便と思ふて渡してたべ、慈悲ぢや情ぢや、聞分てと賴みつ、かこちつ手を合せ歎き沈むぞ哀れなり、こなたは猶も空吹く風、ム〻それ程賴むなら、渡してやらうと言ふたらよからうがマアいやぢやおりやアノ山伏に緣もなし、又由緣もなけれど、渡されぬと言ふ譯を、耳をさらへてよふ聞けよ、われが尋る山伏の賴には樣子有て某は、道成寺へ逃行者、十六七の女が來たら必ず渡して呉れるなとコレこまがれくれて賴まれたれば金の冥利で此川を渡す事はナラヌワイ、寒氣をしのぐ山伏の八重か一重か板一枚、下は地獄の此身すぎ賴まれたらば男づく、いつかな渡さぬマアならぬ、われもまたどれ程にこがれても及ばぬ戀ぢや、役にも立たぬあごきかずと、足元の明るい内、とつとゝいれ〳〵ヱ〻うぢ〳〵とうぢ付いて掉の馳走を喰らふかと、慈悲も情も中々に渡す氣色も

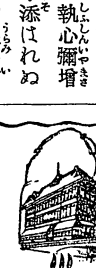


化粧タイル
水道衛生工事
洗面、浴場、
水洗便所設計
汚水淨化裝置
特許無臭便所

西區立賣堀北通一丁目
新一橋
岡部商會
電話新町一六六九
一二七六
阪急夙川
岡部商會支店
電話西宮一九七六

なかりける、姫はあるにもあらばこそエヽ聞えませぬ〳〵安珍樣、恨はこつちにある物を、かへつて此身に恥かゝされ、何とながらへ居られふぞいのふ、今日迚も父上の御異見、御尤とは思へ共、女は一度我夫と、思ひ込だら魔王でも、譬へ鬼でも變化でも、可愛いといふ輪會は離れずまして五月の宮詣でに、ふつと見染めし其日よりいとし床しい戀しいと夢現にも忘れ兼れ、こがれこがるゝ戀人に逢て嬉しい言の葉を語らふ間さえ情なや、戀の呵責に碎かれて身は煩惱につながるゝ苦蓮の氷、大焦熱、阿鼻修羅地獄へ落る共思ひ切られぬ安珍樣聞えぬわいなと、身をもだへ、わつと計りに聲をあげ歎く涙の雨車軸、其名も高き紀の國や、日高の川に水增て堤もうがつ如くなり、泣目を拂ひすつくと立ち、エヽ妬ましや腹立や、思ふ夫を寢取られし、恨みは誰に報ふべき、たとへ此身は川水の底の藻屑と成る迚も憎くしと思ふ一念の、やわか晴さで置くべきかと、心を定め身繕ひ、川邊に立つより水の面も寫す姿は大蛇の有樣、扨は悋氣嫉妬の執着心、邪心、執心彌增り、我れは蛇体と成しよな、最早添はれぬ此身の上、無限奈落へ沈まば沈め、恨を言ふて言ひ破り、取殺さいで置かふかと、怒りのまなじり齒をかみ鳴らしあたりをにらんで火焰を吹き、岸の蛇籠もどふ〳〵と青み切つたる水の面ざんぶとこそは飛入たり船長見るよりわななき聲、鬼になつた蛇に成つた、角が生えた毛が生えた、食ひ救されては叶はじと跡をも見ずして一散に飛ぶが如くに逃て行く、跡に怒りの髪逆立て、不思議や立浪逆まいて憤怒の大頭へ角振り立て、鱗逆立て、くろ〳〵〳〵怪しかりける次第なり。

御宴會はまづ！



四ツ塚

涼し い川風情趣のいかふの

南一溫泉料理へ

南一溫泉料理のまさなみ

お電話 南…以月御の
番一一七・一〇七・五
番一九二五・二三一・
番〇三六西

四ツ橋畔
より

四月、五月、六月の文樂座消息日誌

附　學生マチネー

△四月一日

四月興行の初日開場

前「假名手本忠臣藏」大序より九段目迄

切「三勇士名譽肉彈」全　三場

△四月四日

大阪遞信局長、平塚市電氣局長等の御來場あり。

△四月五日

大成駒屋中村鴈治郎丈が瓢然と見えられ忠臣藏の由良之助、三勇士等に一層興味深き態でありました。

△四月十日

BK吉例の舞臺中繼放送を左の通りのキヤストで放送す（午後七時三十分より）

「假名手本忠臣藏」の「祇園一力茶屋の段」

太夫　由良之助（相生）　平右衛門（つばめ）

おかる（小春）　絃（團六）

人形　由良之助（榮三）　おかる（文五郎）

平右衛門（玉松）

△四月十五日

瑞西國セトニー・プラウン博士御來座、博士は昭和九年度に開かれる赤十字國際聯盟の東洋會議準備委員として來朝された人で大阪府齋藤知事、赤十字社長の方々のお招きにより日本武士道の「忠臣藏」を賞鑑せられました。

△四月十五日

獨逸の漫畫家若きミヒヤエリス氏は大毎連載漫畫の資と珍らしい藝術鑑賞慾に驅られて御來座、別室で紋十郎より人形の遣ひ手について説明を聽き自らも操る等興味いと深く忠臣藏の八ツ目道行を見て

大阪御池橋
茶屋
電話新町二三二番

ワンダフルを連發してゐた。左に感想の一端を記す。

伊太利のマリガネットも見たが到底この秀れた比じやない、これは私の始めて見た驚異の一つであるとて全く蕩酔からさめやらず激賞してゐた。

△四月十七日

「三勇士名譽肉彈」を舞臺中繼放送す（午後零時五十分より）

この日特にマチネー開催し、この中繼實況と忠臣藏の六ツ目を觀覽に供した。

第一　忠臣藏六ツ目勘平切腹の段（相生芳之助）

第二　三勇士名譽肉彈（大隅、相生、つばめ、呂、鏡、隅榮、長、淀路、小春）

友次郎、仙糸、廣助他榮三、文五郎、玉次郎他

マチネー參加團は泉尾、中大江、集英、下福島春日出、築北、各家政技塾女學生、泉尾母の會の方々。

△四月十八日

大阪市廳產業部に本部を置く大阪尙志會の總會場として全部賣切四月興行を總見せらる。

△四月二十三日

昭和七年度大阪府下中等學校校外敎護聯盟主催の學生マチネーを開催。

二十三日、二十四日、二十五日、二十六日、二十七日、二十八日、二十九日、三十日、五月一日まで八日間に渉り、七十一校の男女中等學生約一萬三千數百餘名の多數で盛觀を呈しました。

番組は　映畫「父に遇ひたくば」「空閑少佐」人形淨瑠璃「三勇士名譽肉彈」

太夫（大隅、相生、つばめ、呂鏡、小春等）

三絃（友次郎、仙糸、廣助、友造他）

人形（榮三、文五郎、玉次郎、他若手連）

△四月二十九日

華々しかつた四月特別大興行も未曾有の好評裡に打上げました。

△五月一日

特別マチネー開催、午後八時二十

分より豊竹古靱太夫の「忠臣藏六ツ目勘平切腹の段」を舞臺中繼にて放送。

番組は、この外に映畫「父に遇ひたくば靖國神社へ」人形淨瑠璃「三勇士名譽肉彈」

間（三日間替り）

第一回　一谷嫩軍記（陣門より陣屋まで）　大隅、古靱

心中天網島（河庄）　津、

壽連理の松（生玉の段　湊町の段）　土佐、

三勇士名譽肉彈

第二回　本朝廿四孝（桔梗ヶ原　下駄勘助）　大隅、

平家女護島（鬼界ヶ島）　古靱、

伊賀越道中双六（沼津）　津、

桂川連理柵（六角堂　帶屋）　南部、土佐

三勇士名譽肉彈

第三回　菅原傳授手習鑑（車場）

傾城反魂香（吃又）　呂、

近江源氏先陣館（兵衛上使　首實驗）　大隅　津

冥途の飛脚（淡路町、封印切、新口）　相生、土佐、古靱

三勇士名譽肉彈

第四回　繪本太功記（夕顔棚　尼ヶ崎）　呂、大隅

艷姿女舞衣（酒屋）　土佐

菅原傳授手習鑑（寺子屋）　津

芦屋道滿大内鑑（葛の葉　子別れ）　古靱

三勇士名譽肉彈

△五月二日

女子因會の方々で出征戰死者遺族慰問大會を催され非常の好評。

△五月三日

本日も引續き開催「三勇士」は素義ながら多大の感激を喚びました。

△五月四日

文樂座大一座は本日初日で東京公演、東京劇場、十八日まで十五日

第五回　瓦辨杉の由來
（志賀の里より二月堂）　古馥
假名手本忠臣蔵（勘平切腹）　津
廓文章（吉田屋）　土佐
新版歌祭文（野崎村）　大隅

△五月二十一日
東京劇場公演を大成功で打上げ歸阪した文樂座入一座は本日より二十六日まで（六日間）を限り神戸松竹劇場へ引越興行を開演しました

第一回　繪本太功記（夕顔棚、尼ヶ崎）　呂大隅
艷姿女舞衣（酒屋）　南部、土佐
菅原傳授手習鑑（寺子屋）　相生、つばめ
芦屋道滿大内鑑（葛の葉、子別れ）　津、鏡、古馥
三勇士名譽肉彈

第二回　伽羅先代萩（御殿、提伐より）　相生、つばめ、南部、土佐
攝州合邦辻（合邦内）　呂、津
近頃河原の達引（河原堀川）　大隅、古馥
三勇士名譽肉彈

第三回　伊賀越道中双六（沼津より山）　大隅、津
御所櫻堀川夜討（辨慶上使）　古馥
三十三所壷坂寺（澤市内）　土佐
三勇士名譽肉彈

△五月五日
調正會第一回常磐津演奏大會開催

△五月二十六日
素義浪花大會が新日報社主催で開催。

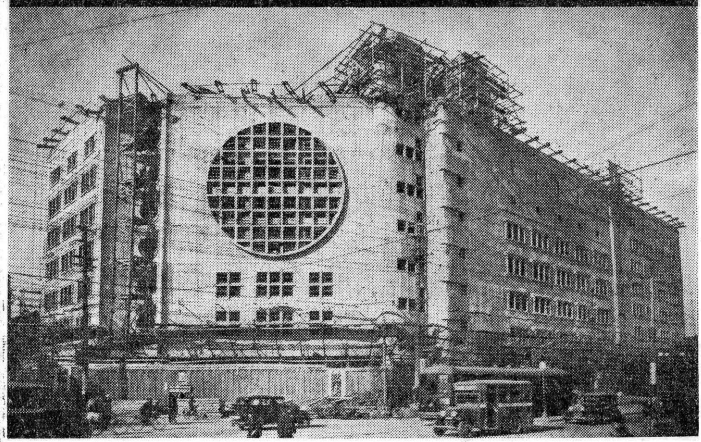
△五月二十七日
引つぎき浪花大會開催。

△六月四日
文樂座四ツ橋新興以來大一座初の西日本巡業に旅立つ、（土佐太夫の替りに鏡太夫加入）
劇場は廣島、壽座を振出しに、博多大博劇場、熊本旭座、若松旭座
六月十五日打上十六日歸阪。

△六月十一日
京都南座へ進出、上演曲目三日替十一日間、六月二十八日迄。

竣工愈々迫る大阪歌舞伎座

御ヒイキ・サークル募集



演劇の錦城・大阪歌舞伎座

斯界を冠たるべく、外觀の極善美と内容の超充實を期し、諸員君の築の業に就きましてより既に二歳餘、從事致力すること程なるに到りました。特筆大書すべき新設の工事を進めるに當り、今やその大半の敷々を抱含してゐることは茲に敢て贅言を要しないところであります。更には、皆様の娯樂なり爽快な雰囲氣を――開場の上は、皆様の設備を、より鑑賞なりに一層の意義を生ぜしめたい――とたゞこの初一念を、徹頭徹尾吾が大阪歌舞伎座の上に具現せんとしてゐる次第でございます。皆様！竣工の上は皆様の御支持に依る大阪歌舞伎座をして、竟に世界一の矜持を懷かしめられんことを、竣工を前にして切に希上げます。

されば、大阪歌舞伎座は『皆様の大阪歌舞伎座』なるスローガンを眞向ふに奮勵努力する存念で同時に皆様の御支持を絶對に必要とする次第であります。

何卒『**御ヒイキサークル**』に御加盟の上皆様の御芳名をお載せ下さい。

規定

◇用紙　官製**ハガキ**（御一名一枚）

◇會費　不要

◇届先　御住所氏名御職業明記の事

大阪市南區久左衛門町八
松竹興行株式會社大阪支店内

歌舞伎座假事務所

文樂座使用料　（一日）

時間／場所	收容人員		晝（自正午至午後五時）	夜（自午後六時至同十一時）	晝夜（自正午至午後十時）
文樂座	約850人	平日	80圓	100圓	160圓
		土曜	80圓	110圓	170圓
		日曜祭	90圓	110圓	180圓

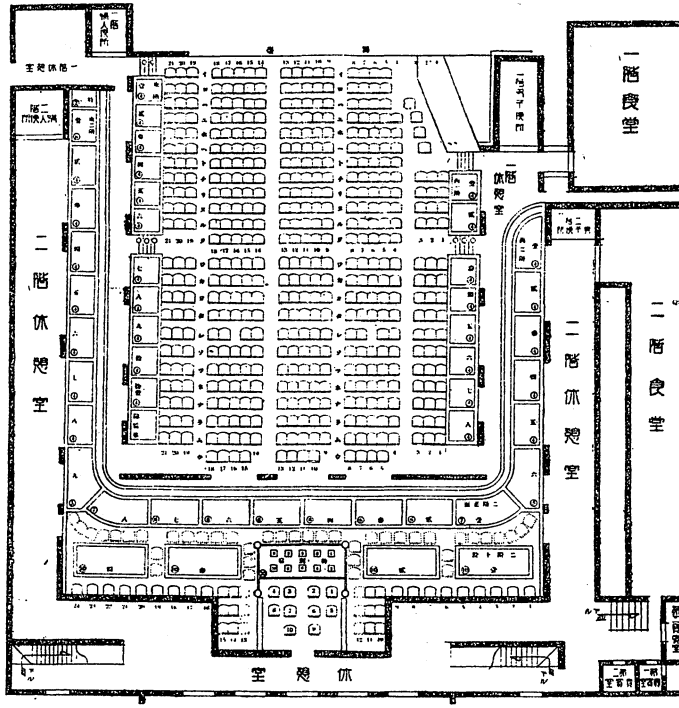
◇上記時間ハ季節ニヨリ多少ノ伸縮ヲ致シマス

◇割引——ソノ集會ノ性質ニヨリ割引スルコトガアリマス

器具御使用料

器具	備考	數量	料金
舞臺照明電氣料	晝夜普通燈ノミ	1回	15圓
同	同　普通燈ノミナラザルトキ	1回	20圓
所作舞臺	晝　夜	1回	10圓
活動寫眞設備	晝又夜映寫設備電氣技師共	1回	50圓
同	晝夜通シ	1回	70圓
アプライトピアノ	晝　夜	1回	20圓
音樂譜面臺	晝　夜	1臺	10錢
アークスポット	晝夜4・5 KW	1臺	10圓
スポット	同　大（1000W）　小（500W）	1臺	5圓
サイド・ライト	500W 1000W	1臺	5圓
シーリングスポット	100W　500W	1臺	3圓
サスペンシヤンライト	100W　500W	1臺	2圓
フツトライト	20W　100W　7球	1本	1圓
ビラチンペーパー		1枚1回	1圓
大衝立	晝　夜	1對	5圓
演壇設備	同	1回	2圓
其他	必要ニ應ジ實費		
受付2名、案内10名、電話係2名、下足2名	1日1人　1圓宛		16圓
冷風裝置使用料			無料
暖風ラヂエータ使用料			無料

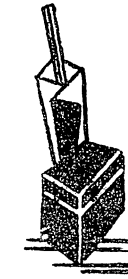
文樂座御席場御案内


一階食堂
一階休憩室
二階食堂
二階休憩室
二階休憩室
一階休憩室
二階入口
一階入口
一階入口
二階入口
一階入口
二階入口
一階入口
二

文樂座食堂御案内

洋食堂（西館階上）

スピード・ディナー（御定食）　一、五〇
スープ　四〇
フライ（海老、魚）　時價
オムレツ　四〇
コロッケー　四〇
ビーフカツレツ　四〇
チキンカツレツ　四〇
ビーフステーキ（五分間）　五五
カレーライス　三五
チキンライス　四〇
コールドチキン　五五
コールドハム　五五
コールドビーフ　五五
マカロニーチース　四〇
アスパラガス　四〇
サンドウイッチ　四〇
ソーダ水（特製）　二〇
文樂スペシアル　一、〇〇
ビーフステーキ



和食堂（西館階下）

吸付辨當　一、〇〇
御食事（五品御飯香物）　二、〇〇
親子丼　五〇
にぎり壽司　五〇
ちらし壽司　五〇
雀壽司　五〇
鐵火卷　五〇
赤だし　三五
お吸物　二五
菊正宗　三五
特アサヒビール　五〇
ダイヤレモン　三〇
ソーダ水（普通）　一五
紅茶　一〇
ケーキ　一〇
アイスクリーム　二〇

酒場（西館階上）

文樂カクテル　七〇
マンハツタンカクテル　六〇
ドライマテニイ　六〇
アプサンフラツペ　一、〇〇
ミリオンダラー　九〇
ミリオネア　各種　七〇
ウイスキー　各種
コニヤツク　各種
リキユール　各種
チーズ　各種　二〇
ソーダビスケツト

洋酒　お茶

南一温泉料理經營

文樂座使用規定

一、當座御使用御希望者ハ當座備付ノ用紙各項ニ詳細御記載御申込下サイ

二、御使用責任者ハ當座御使用規定ヲ固ク御守リ下サル事ハ勿論、器具備品等ノ管理取締ノ責任ヲ御盡シ下サイ若シ右ニ違反セラレタル時ハ故意ト過失ヲ問ハズ御使用前デモ御使用中デモ御使用ヲ取消シ致シマス

三、當座御使用料金ハ別表ノ通リデアリマス長期間ニ渡ル御使用ハ特別ニ御相談申シマス

四、御使用料金ハ當座ガ御使用ヲ承諾シタル時直ニ御收メ下サイ、既納ノ御使用料ハ一切御返却致シマセヌ

但シ不可抗力ニヨリ當座ガ御使用ニ堪エナクナツタ時ハ全額御返却申シマス

御使用一週間前迄ニ御使用御取消又ハ御變更ヲ申出デラレシ時ハ半額御返却申シマス

五、御使用方法ニヨリ當座ガ必要ト認メシ時ハ御使用者ノ費用デ必ズ其ノ設備ヲシテ戴キマス之ノ設備ヲ怠ラレシ時ハ御使用ヲ取消シマス

六、御使用者ノ御希望デ當座ノ承認シタル場合ハ御使用者ノ費用デ特別ノ設備モ出來マス

七、五、六項共ニ御使用濟ノ場合ハ直ニ之ヲ撤去シテ戴キマス、之ヲ怠ラレシ場合ハ當座ニテ之ヲ施行シ費用ハ御使用者カラ申受ケマス

八、御使用中建物又ハ附屬品ヲ毀損或ハ減失サレシ時ハ當座ノ定メル損害額ヲ御使用者カラ辨償シテ戴キマス

九、御使用者ハ當座從業員ノ職務上ノ入室ヲ拒マレル事ハ出來マセン

十、當座從業員ニ於テ認メタル人數以上ノ御入場ハ御斷リ申シマス

既發行ノ入場券ニシテ使用不可能ノ場合ハ御使用者ニ於テ御責任ヲ負ハレ當座ハ一切其ノ責ニ任ゼマセヌ

十一、臺本檢閲並ニ興行顧ハ一切御使用者側ニテ御取配下サイ

は憩休御

一階西側の御休憩所へ

。すまゐ座御が備設とのルオタ蒸お茶

用使「ンヨシーロトーレ」はにルオタ蒸

上召で處此は草煙御、らかすまゐ座御が臺煙喫もに下廊各

。いさ下て

。いさ下慮遠御は煙喫の内場

に産土お

書葉繪摺手版木樂文

品作の氏郎二清藤齋るあ評定て就に繪樂文て於に會陽春

共裝包いし美　組一枚三・行發月毎・

錢十五金　部一

の語スンラフ

『究研の居芝形人樂文』

著氏男綱嶋宮

錢十八圓壹金　部一

錢十三金　部一『堀頓道』誌雑刊月

お食事は

西側別館の階上、階下に大食堂と喫茶室酒場が御座います。階上は洋食とバー。階下は和食本位の食堂、食事時間は混み合ひますから一幕前に豫約を願ひますとお仕度を整へてお待して居ります。

賣店は

一階と二階の東側休憩所に御座います。お菓子、番附、雜誌、お煙草その他幕間のお慰みの品々を取揃えて御座います。

お化粧とお手洗

殿方は西側の一階と二階に、御婦人は東側の一階と二階に御座います。(クラブ化粧室。)

お煙草は

一階二階廊下に喫煙臺を備へてありますからお煙草はぜひ此處でお願ひ致します

御携帶品は

御座席では御遠慮下さい

正面一階に御預り所が御座いますからお持ちものはなるべく御預り所へお預け下さい。お帽子は椅子の下に設備がありますからそれへお願ひいたします。

御歸りは混雜いたしますから成るべく終演一幕前に御受取を願ひます。

御歸りは混雜いたしますから成るべく終演一幕前に御受取を願ひます。

お出口は

充分注意致しますが不可抗力の損傷は何卒御諒承下さい。

お下足札赤札は正面西本家入口でお渡し致します。

黑札は正面入口東側でお渡し致します。

貴重品は

各位にお持ち下さい、お場席お立ちのときは御携帶願ひます。

お場席券は

各自に御持ち下さいまし、切符に一枚づゝ番號が附いて居りますからお場席の番號をお忘れないやうにお願ひいたします

案内人へ

御祝儀お心附は堅くお辭退申上げます。不行届の點は事務室まで御注意の程お願ひいたします。

幕間中は場内にて

案内人がお茶を差し上げますから御休憩所で御自由にお飲み下さい。

出演者

寫眞撮影は絶對にお斷りいたします。

病氣其他の事故にて出場不可能の場合は乍勝手代役にて相勤めますから、豫め御諒承願ひます。

當座御使用の

場合は事務室へお申込下さい『文樂座使用規定』を差上げて御相談をお受けいたします。各種催物、御集會其他社交場として御使用には最善の御便宜を計ります

御休憩の間は

一階西側に給茶處と大休憩所の設備が御座ゐますから御使用下さい。

四ツ橋 文樂座
前賣切符專用電話南四七二番
電話南 三七八〇八番

昭和七年六月廿日印刷
昭和七年七月一日發行
大阪・四ツ橋文樂座
發行人 大塚良三
編輯 成山桂三
印刷者 永井太三郎
大阪市西區土佐堀通一丁目
印刷所 永井日英堂印刷所
大阪市西區土佐堀通一丁目

夏の大阪に

涼い興樂「文樂座の御宴會」がお待して居ります

冷風裝置完備て涼しい劇場
御好評を戴く大阪一の宴會劇場

金三圓二十錢也（御一名樣分）

御觀覽は……一等椅子席
御食事は……和食・洋食
番　附……役割と床本入
記念寫眞・人形をゐれた特別撮影
（即日お持歸りの出來る樣準備致します）

御申込は廿人樣以上なるだけ五日前に願ます
お電話は南四七壹壹番お申附け下さい

海水浴は
阪和浜寺へ
近代的諸設備完全
快速車頻発 急行十四分
賃金大割引
あべの橋
阪和電鉄